

橫其美被爲塞天下願望之責度乍恐奉歎願候臣平生欲以一死奉報區々之志如是に御座候何卒可然御斟酌被仰付被下候は、死を瞑目仕候臣於昨年之冬以來幽囚被仰付置候へは當時如何之御形勢に御座候哉何も不奉存既に其機會をも打逃候者之今更事々敷奉言上は恐懼之至に奉存候得共於御國許取唱候向承知仕居候は於臣子實口惜眷々一念滿腹溢曾難止御座候間無用之贅言とは奉存候得共心之儘奉言上候

謹按處廟堂者言之其言雖不善人從之也推之則反信仰焉處困窮者言之其言雖善人不從之也推之則反嘲笑焉其弊亦可悲惑哉臣寬胤下獄縲紲困窮者也二月四日所上書自困窮中矣至其欲立非常忠義其言雖善恐入不從之推必嘲笑尙可委不辨之則爲一時以頰舌善辭說欺君者矣臣雖懼之篤病不能如何空沈枕耳在獄中甚慨然歎息臣之志勃然憤欣然喜乃執筆危座枕上吐一言記一言出一語書一語積二三日遂寫錄自癸丑年至今日所其酬報塞責之概略爲卷矣蓋於今日無用贅言管奉表不欺君而已矣曾子曰鳥之將死其鳴也哀人

之將死其言也善臣之嚮所上言雖不敢當曾子之意則將死之言也非有再言者而有此書實者之賜因厚謝之乃云掃攘本馴服末張本復舊末基本々垂統末此卷及始而不及極致極更切賾得失之相形應酬其萬變心跡之糟粕何足道唯其平生之志潛思積慮存養之工夫深持守之確如也本末始終一貫之三願不融死而不腐矣將陪從古今之間忠臣義士在天之神靈輔翼天柱萬分之一凡子孫曾臣之血流有繼續此志勉策憤勵所奉報也矣冒瀆不遜越等之罪無所逃之誠惶誠懼死罪歲在文久甲子夏四月 日臣寬胤謹獄中上焉

探襍錄卷六

一 因幡藩主源慶徳朝臣上表之事

微臣慶徳去冬奉蒙 勅命候に付は速に登京可仕筈に候得共傳奏迄及言
上候通痛處今以在苒罷在迎も旅行仕兼出京及延引候段恐入奉存候折柄
御下問も無之義猥に及建言候段其罪不輕候得共昨夏上京以來實に蒙非常
之 恩寵毎々參 朝 御直命をも畏候義尙更日夜 九重之御義不堪杞憂
區々之愚慮寢食をも不安尙又申上候抑去秋以來何と無億兆之心
朝議御動搖被爲在候様奉疑模様無之共難申於臣慶徳は 朝議今更御動搖
無之御事とは奉存候其譯は先達る在京之砌參 朝之節度々大臣兩卿へも
親く奉伺候處於攘夷之義は
叡慮確然無御撓趣尙一橋中納言へ八月十八日以前 御沙汰之通攘夷之義

精々盡力之様可申通旨以傳奏被 仰出之趣も奉畏且勤
王之諸藩憤發不待幕命可及掃攘等之 勅命も蒙其後阿波侍從等詰合諸藩
へ毎々東下攘夷之義尙又御催促 御沙汰等も有之引續 有栖川宮御下向
之御内意も有之候得共其内於關東攘夷之談判取掛之趣言上に相成候に就
ては暫時其義も被止之趣幸老中酒井雅樂頭上京に付ては尙更嚴重之 御
沙汰にも相成候歟にも奉伺一橋中納言登京之義被 仰下候節も攘夷談判
之模様被 爲聞食度との 御趣意且又大樹上洛被 仰下候節も萬一留守
中鎖港攘夷之談判相弛候ては以之外之義と被 思食候に付可然人體致委
任置攘夷之
叡慮は必貫徹被遊度様 御沙汰之趣も奉伺候得は 叡慮御動搖無之義は
深奉畏候然處前文之通 御動搖被爲在候様紛々傳聞仕候是全不知實者之
妄言とは奉存候得共萬一右等聊にても 朝議御動搖御座候ては自然天下
士民

九重之深淺を窺解體仕既疑者益疑を生し遂に不信 朝命様可罷成畢竟列
藩より草莽之士に至迄踊躍奮發仕候義も
至尊之聖徳を奉感戴補相之賢徳に鼓動せられ候義御座候處此節に至り攘
夷變て若開港と相成候様之義有之候ては乍恐天下之銳氣此より相撓み候
事と深恐入奉存候是迄毎々言上仕候義改て申上候にも不及候得共民無信
不立一旦攘夷之義期限迄も布告に相成加茂八幡へ
行幸御祈願被爲在程之義且攘夷之義被 仰出候以來入水火踏白刃其爲に
殞命者幾千人に及び左すれば萬一 叡慮御動搖に相成候は、神怒り鬼怨
み隨て間關流離之者も亦慍可申述も人心居合候期有御座間敷奉存候間何
卒攘夷之 叡慮御貫徹相成天下之人心一和一致仕候様不堪至願候人心一
致仕候得は武備不整御座候共神州舉て焦土と相成候迄も是非夷賊掃攘と
覺悟定居候は、必 叡慮貫徹に可至候間尙又發揮被遊多年之 御宿志を
被爲遂候様仕度就ては海内之人心一定仕候様之御處置無之ては不相成様

奉存候萬一海内之人心錯亂仕候得は忽其間隙に乘し候て夷奴逞志仕候義は必然之義に付先達も申上候通三條家以下之人并長州父子之御處置甚以不容易御大事之義と奉存候一旦錯亂仕候は逆も一致之期に不可至實に神州之御大事に付何卒御心を被爲留度奉存候三條家七人并長州家蒙勅勘候義其罪可有之候得共攘夷之叡慮遵奉苦心仕既に掃攘之魁をも仕候程之義若寛大之御處置に不相成候は攘夷之先鋒たる長州すら御嚴罰を蒙に至る唯因循姑息之優るに不如と人心存天下之銳氣相撓可申歟尤家來之者共に於ては粗暴過激^て候振舞も有之哉にも相聞候得共畢竟父子攘夷決心仕より領内之人民相化奮勵決死中にも少年客氣之輩間關流離之徒に至候は粗暴之所行にも及候義歟と存候勿論其罪可有之候得共前文申上候次第旁去秋之始末辨疏之爲此頃家老近畿迄差出候得共入京堅御差留之趣に而進退實に極り候趣承及候右等之御處置に相成候は大膳大夫父子は恐入候も領内之人民痛憤難默少年客氣之輩間關流離之徒如何様

之變動相起候も難計自然及紛亂候は御取鎮も中々不容易且内地之變動夷賊之素より待所に御座候得は求る彼か術中に陥り神州をして渠か有と成らしむる理に當り可申歟と憂慮仕候乍恐萬一皇國中内亂起り候は攘夷之一條如何可相成哉攘夷之義より事起り攘夷之妨と相成候而已ならず皇威御衰微と可相成候間三條家以下勝手出奔之罪長州之藩過激之科は一應御正し被遊候とも何卒攘夷先鋒之功を以寛大之御處置に相成三條家以下歸京長州入京被免候は、人心居合可申歟と奉存候右言上之趣必しも曲て彼等を相救候に而は毛頭無之候得其實天下安危之機と奉存候に付難默止不顧不肖言上仕候臣慶徳前文之次第不幸病薨に罷在上京難仕無據以書取申上候微衷旨御探酌之上可然執奏奉希候恐惶頓首々々謹而呈執事 正月十日 (元治元年)

慶徳

二 府中藩主京禁歇幕命之事

細川越中守

長幼一家之儀に付るは兼る 御所より御沙汰之趣有之候處毛利左京亮儀
近々上京之趣相聞候間上京之儀は見合大坂表に罷在候様相達候得共押
上京之儀も有之候は不都合之儀に付萬一其方固場桂川久世村道京極佐
渡守申合通行之儀も有之候節は上下人數共通行指留候積に相心得候様可
仕候 二月十九日 (元治元年)

三 或人就縛時書付て家に遺る歌之事

甲子元旦

久堅比天乃戸明て出ふ日比ひりも捲ひて春をきよなり
新玉比年のを長く神垣よかけて終祈る御代比榮茂

輿中作

起て祈り伏てそ思ふ一筋を神をえらむ我國比ふめ
浮雲比よしかゝる身となれぬとも靈幸ふ神比えろし決してむ
曇りかた御代は逢ふ身は浮雲比かゝるなけきを唯暫れみ
兄弟や親族は天比戸のありりよつ日を待てふまへや

二月五日 (元治元年)

大野鐵兵衛安園

四 幕府沙汰之事

此度松平大膳大夫父子へ御糺問之筋有之萬一承服不致節は 御征伐可被
遊 思召に付其節は爲打手其方人數差出候様被 仰出候間可致用意旨御
内意被 仰付候事

御陳代 紀州 惣裁 會津

薩 劔 肥後 小 倉 藝州 備前
因州 阿劔 久留米 加州 彦根

其外播州之内小大名三四藩都合十六藩之由

右之通と申儀薩藩千田傳左衛門我藩某へ噂致候由 二月中旬 (元治元年)
但其砌志水又七方二月廿二日早打にゐ着即夜沼田勘解由殿早打にゐ到
着本行之事之よし

五 宸翰勅諭之事附 江戸右大臣奉 命之事

朕不肖の身を以夙に 天位を踐み忝も萬世無缺の全甌を受恒に寡徳の
先皇と百姓とに背んことを恐就中嘉永六年以來洋夷頻に猖獗來港し 國
體殆と危こと云へからす諸價沸騰し生民塗炭に困む 天地鬼神夫れ朕を
何とか云ん嗚呼是誰の過そや夙夜是を思て止こと能はす嘗て列卿武將と

是を議せしむ如何せん昇平二百有餘年威武の以て外寇を制壓するに足ら
ざることを若し妄に膺懲の典を擧んとせば却て 國家不測の禍に陥んこ
とを恐る幕府斷然 朕か意を擴充し十餘世の舊典を改め外には諸大名の
參勤を弛め妻子を國に歸し各藩に武備充實の令を傳へ内には諸役の冗費
を省き入費を減し大いに砲艦の備を設く實に是 朕か幸のみに非ず 宗
廟生民の幸なり且去春上洛の廢典を再興せしこと尤嘉賞すへし豈料らん
や藤原實美等鄙野匹夫の暴説を信用し宇内の形勢を察せず 國家の危殆
を思はず 朕か命を矯め輕卒に攘夷の令を布告し妄に討幕の師を興さん
とし長門宰相の暴臣の如き其主を愚弄し故なきに夷舶を砲撃し幕使を暗
殺し私に實美等を本國へ誘引す此の如き狂暴の輩必ず罰せずんはあるへ
からす然と雖皆是 朕か不徳の致す所にして實悔慙に堪す 朕又おもへ
らく我の所謂砲艦は彼か所謂砲艦に比すれば未だ慢夷の膽を吞に足らす
國英^{威カ}を海外に顯にたらず却て洋夷の輕侮を受ん故に頻に願ふ入ては天下

の全力を以て攝海の要津に備へ上は 山陵を安し奉り下は生民を保ち又列藩の力を以て各其要港に備へ出ては數艘の軍艦を整へ無^飽餒の醜夷を征討し

先皇膺懲の典を大にせよ夫去年は將軍久しく在京し今春も亦上洛せり諸大名も亦東西に奔走し或は妻子を其國に歸らしむ宜なり費用武備に及はざること今よりは決して然るへからす勉て太平因循の雜費を減省し力を同じ心を專にし征討の備を精銳し武臣の職掌を盡し永く家名を辱ること勿れ嗚呼汝將軍及各國の大小名皆 朕か赤子也今天下の事 朕か共^とに一新せんことを欲す民の財を耗すこと無く姑息の奢を爲すこと無く膺懲の備を嚴にし祖先の家業を盡せよ若し怠惰せは特に 朕か意に背くのみに非す 皇神の靈に叛くなり祖先の心に違ふなり天地鬼神も亦汝等を何とか云んや

文久四年甲子春正月

イに無

六 將軍請書之件

先月廿七日拜見被 仰付候

宸翰の 叙旨は 御即位以來 皇國の災禍を悉く 聖躬の御上に御返求被爲在候 勅諭にて誠以恐惶^懼感泣の至奉存候 臣家茂不肖の身を以て徒に重任を辱しめ紀綱不振内外禍亂相踵頻年奉惱 宸襟候而已ならず去春上洛の節攘夷の 勅を奉すと雖も其事實遂に難被行横濱鎖港談判すら未だ成功の期限も難量折柄再 命を奉に依て上洛仕候上は極て 逆鱗に觸れ嚴譴を可相蒙者素より覺悟仕候處意外の 宸賞を奉蒙候而已ならず至仁の恩諭を以臣家茂并大小名を赤子の如く 御親愛將來を 御勸誠^誠被爲在候條 臣家茂一身の上に取り海岳の 鴻恩實に以可奉報答様も無之候自今以後萬事の舊弊を改め諸侯と兄弟の思を成し心力を合せ臣子の道を盡し

勉て太平因循の冗費を省き武備を嚴にし内政なカ整へ生民の蘇息を致し攝
海防禦は勿論諸國兵備を充實仕洋夷の輕侮を絶ち砲艦を嚴整にし遂に膺
懲の大典を興起致し御國威を海外に輝耀すへきの條件等彌以勉勵仕乍恐
宸襟を奉休憩度奉存候事に御座候乍併膺懲妄舉仕間敷との 叡慮の趣は
堅く遵奉仕必勝の大策相立候様可仕奉存候尤横濱鎖港の儀は既に外國へ
も使節差出候儀に御座候得は何分にも成功仕度奉存候得共夷情も難測候
得は沿海の武備に於ては益以奮發勉勵仕武臣の職掌固守仕大計大議は悉
く國是を定め
宸斷を奉仰 皇國の衰運を挽回して外は慢夷の膽を呑み内は生靈を保ち
奉安

叡慮上は

皇神の靈に報ひ奉り下は祖先の遺志を維述仕度奉存候是則ち臣家茂の至
誠懇禱に御座候依之此段御請奉申上候臣家茂誠恐々々頓首謹言御請

臣家茂

七 水井山本二士に關する件

薩摩上乘

大谷仲之進

右之者事去冬泉州堺之津より長崎運送として莫大之綿油其外買込積下り
候趣相聞候に付此度於周防國別府浦に嚴重及糺明候處外夷爲交易之積下
り候段逐一及白狀豈計んや薩藩順聖公已來尊攘之義を被唱天下之人心
奮起いたし是程之處唯今に至り先公之深旨を忘却し外夷と令交易候段全
諸役人貪慾に無耻私計にして上は十餘年來日夜
宸襟を被爲惱斷然被 仰出候攘夷之
聖衷を蔑如し下は諸品拂底物價高直相成人民次第に困究に迫りしをも不

顧内は
神州の國力を疲弊せしめ外は豺狼に等しき夷賊の術中に陥り 神州有限
之品を以て夷賊無厭之慾に充んとす其罪惡天地に不容 神人俱に怒る依
之其品燒拂船中居合之奸吏を誅し世間爲交易者を戒めん爲如斯令梟首も
の也

裏書

我等兩人所存有之國元致脱走居候處此度泉州より莫大之品物買込令交易
候段相聞候に付附規ひ加誅戮全是より爲交易者を改心させ乍恐攘夷之
叡慮相貫度致割服候旨我等之赤心天地神明之照覽賜はん事謹而祈處也

二月廿六日 (元治元年)

水 井 精 一

辭世

山 本 誠 一 郎

數あらぬ名を揚よてと思ふ身をそる取くきゆる野邊の朝露

水 井 精 一 源 通 一

或曰長藩呼
哉因循しての人呼
下をなすは
夫かふらしての
寒かふらしての
又胸中ふらして
國君危念今
秋長藩の急
氣を長藩の
下をなすは
嗟呼る哉

或曰長藩呼
哉因循しての人呼
下をなすは
夫かふらしての
寒かふらしての
又胸中ふらして
國君危念今
秋長藩の急
氣を長藩の
下をなすは
嗟呼る哉

雨風よ散ともよしや櫻花君の爲ならなよりいとそん

山本誠一郎源朝正

大君のそめる心は流をはるきてよこも中川は水

正親町殿へ

大君の大き御心そよとよこち吹風は我よ聞えよ

轉法輪三條殿へ

右甲子二月廿六日大坂本願寺馬建に梟首有之掛札表裏共に文言如此前廿
五日夜半過同所北之門臺にをいて右兩人腹一文字に搔切向ひ合せに伏居
候死骸を同所町人共 官府へ貰厚く葬候事彼等か誠忠人を感せしむるな
り天下之美事可賞歎々々候事

八 長門藩士高橋某殺身遺書之事

私儀兼て外夷猖獗致候に付は實に不堪切齒候折柄攘夷御決定御沙汰相成候に付は何卒相應之御奉公申上度赤間關馬へ罷越候處産島彦にをいて和流御臺場御築立に相成候に付は兼は相好候御流儀之事に付爰こと存入込御願申出候處被遂イに御許容難有仕合奉存候然處去秋上様御上洛被遊候に付は御供をも可被仰付之儀も可有之候に付産島詰之内五拾人山口表へ被差出候由之處私儀右御人數に被相撰身に餘り候儀に御座候得共一同山口表へ罷出候處其後於上關義團御取立に相成候砌又候私式御撰舉に預り當御地出張仕罷在候處當正月十一日兼て同志之者兩人上方より罷下り候由に當津滯船罷在候は相對仕候處扱先年已來攘夷之詔下り候はより恐多も我上様に於ては別は尊王之思召深被爲在遂に御兩國をも御擲被遊候は

叡慮貫徹被遊度思召之折柄此度泉州於堺綿油等澤山買込外夷交易之ため長崎へ積下り候趣相聞候に付附説無是迄罷下り候處此節別封浦無に無彼船滯

碇之由に付早々罷越上乘之者相調様子に寄は天誅を加へ爲御國家爲萬民屹度所存有之由に付實に尤と存詰右兩人と同意仕翌十二日用事有之廿日之御暇に下宿仕度段願出候處御免に相成候は直様右兩人迄同別府浦へ罷越上乘之者及糺明候處大坂に風聞評之通外夷爲交易長崎へ積下候薩易様御荷物之由及白狀候實に其罪天地に不容委細大坂御堂前に梟首有之候掛札之通船中居合之奸吏を誅し其品燒拂其首級去を持猶未た普く瀬戸内相覘右様不正之荷物燒拂度相考候處最早手に不懸其内御暇日數も有之事に右兩人と無餘儀東西に分れ候處去月廿五日夜於大坂南御堂前箇様に始末に相成候上は同志之私實以不堪汗面且此度嚴重御規則も被仰出猥之振舞有之儀は御嚴禁も有之儀に右御規則にも相拘り當時別は御規則嚴密に不相立候は不相叶折柄と乍恐奉存候得は尙更私式一死却は御裨益に相成申候も有之間敷候得共實に御規則に背き候者共其儘罷在候は不相濟後之鑑と申儀にも相成申間敷候得共せめては暴舉之戒にも可相成存

詰且薩藩之儀は兼る御兩敬之御事に付別る奉恐入候間如此割腹仕候尙死
後之重罪幾重にも奉恐入候也

三月十日 (元治元年)

高橋利兵衛臨終書之也

私事先達より御聞及も可被成別府一件に付水井山本之兩士爲國家割腹
に相成今更死後れ残念不過之奉存候依之今晚割腹仕候間別段宿元へ遺書
も送り不申入候愚父共へ被 仰聞被遣候様返々も奉頼候今更未練に相成
候間思殘事毛頭無之萬事宜敷御計可被下候尙又光井嘉吉へどうぶく預け
置候間是は常二郎へ御遣し可被下候三井様守田様其外へ宜敷遺語同様御
傳聲奉願上候早々

波多野謙藏様

高橋利兵衛

死後何卒御取置被成遣候は、格別御憐愍に而神葬被 仰付候様奉願候尙
處之少々つゝのかり掛りも有之候間何卒宜奉願上候以上

九 龍野藩主征夷府へ建議之事

私儀去月十一日以御封書不容易御内命早速上京仕候處猶又 御沙汰に付
乍恐愚意之趣奉建白候客歳攘夷之儀被 仰出候に就るは列侯は勿論下草
莽之士に至迄感奮興起仕既於薩長斷然及一戰候段實以 神州之御武威相
輝千歳之御機會と奉存候和戦之儀に付一時議論蜂起過激之輩も可有御座
候得共かゝる危急之御時勢逐一糺問を被爲遂候は人心彌洶々海内分裂
之基共相成必然外夷之術中に陥り可申と奉存候何卒紛紜之儀は惣而御寬
典に被爲處攘夷之御嚴令聊御變動無之闔國之志纏め全力を攘夷に被爲盡
候は、自然 御國體相立可申哉と奉存候尤御尋に付不願忌諱愚存奉申上
候以上

子三月 (元治元年)

脇坂淡路守

或曰惣多御
寬典に被處
論公の爲人
海嶺南面の
測量ある事
測り知らる

一〇 中原景況之事

さて京師模様段々打替當時大樹公上洛中にて浪士等嚴重入込被禁處々番處等被差置候得共矢張入込居候哉既に早春來三條制札場新制札掛り近來諸浪人并水戸殿浪人等新徴組杯と唱富商へ押入金銀かすめ取候間右等のもの見掛次第打取可申との文面に候處兩度計何方へ持行候哉不相分又々新に掛替都合三十日之内三度取捨候由右は水府藩より致候杯風説有之候得共全は左様に無之由に御座候○參豫と唱一橋宇和島春岳三人日々參内之趣に候處此節又々模様替り島津三郎一橋外一人尾州公三人日々參内と申候國事御用掛と申由に御座候尾張公は今に出京無之○八幡山崎臺場築立に相成候由に御座候○二月六日五ヶ國軍艦大坂長州等へ差向候趣専ら風評候得共今八日迄何之沙汰も無之候乍去二月二日比より幕吏數百人大坂へ

差向候趣儘に承候○二條關白殿中川宮徳大寺右府殿近衛殿御父子御日參先般退役之議奏阿野久世正親町三條の誤カ三條西殿等再役專御政務之由攘夷之儀は此節何方へも行風説無之候○長州家老に今伏見返御返答相待居候由長劔打拂又候被免出京有之杯風説不取留事に候○五ヶ國彌渡來候は、何歟模様も相替候哉に存居候○去御局の御咄之由に三條始此儘に可差置所存には無之候得共時勢難及力之勅諭御座候由實に恐入候事に候○二月十一日會津守護職御免永代五萬石加増陸軍惣裁被仰付參議御推任之由參議之所は此比辭退中之趣○脱走七卿より上書有之攘夷一邊之由猶跡より可差出候○因州備前容堂公は長州同説之由禁中風評有之候○長劔征伐大將紀劔船軍惣裁島津大隅守陸軍惣裁會津其外安藝井伊阿波姫路小笠原肥後等十六大名御内意被仰付今度幕府へ使者差向返答次第出張候由專會藩人之説に候二月長州防カ上關より五里會尾浦船加著九千石積此船に薩州行綿下荷として堺酒積入有之此積荷長藩吟味之節薩人上乘を打果荷物共正月

十四日燒拂候由 右之趣堺船硯屋千三郎より長崎御役所へ申出候由(元治元年)

一 六卿長門國に在て陳情并奏議之事

甲子正月十八日三條殿諸大夫丹羽出雲守三條西殿諸大夫河村能登守被差登 朝廷御建白 臣等分外之 知遇を蒙り莫大之 鴻恩に浴候處去年八月十八日參 内他出等被止候節

勅命違背脱走仕候次第 朝廷之御變事を不顧 叡慮之御深旨をも不奉窺國家多難被惱

宸襟候折柄於闕下微忠をも相勵可申之處不束之進退不憚 朝憲不敬之舉止其罪不輕 宸哀之程も如何被爲在候哉と恐縮仕候處僅被止官位候段 仁恩之厚不堪感泣候自元攘夷之儀は年末之 叡慮に被爲在候處膺懲之事業難被行 宸念貫徹不致義不堪慨歎悲憤之至不顧身力外夷掃攘盡微忠聊

奉慰 宸襟國恩萬分の一をも報度志願に有之候處却る嫌疑に相觸奉對 朝廷懷異心候風説も有之候由鄙情貫徹不仕候段不堪悲歎罷在候前條之次第上 京訴仕度存慮に候得共當節自分共恐不少に付以書取奉申上候仰願 聖明仁憐を被爲垂候様伏る奉願候死罪頓首謹言 右表向一書 臣等 勅勘犯罪之身を以 國家之 大政を猥に奏言仕候者不憚 朝憲儀 戰栗恐懼之至に候得共攘夷之儀は外夷蠻之叛服に相響 内國脉之盛衰に 相係候事故臣子之情分難忍沈黙敢犯萬死鄙衷建白仕候抑外夷拒絶之儀去年以

叡命不拘幕府之示令可掃夷之旨御布告被爲在候處於關東鎖港談判取掛候に付應接中輕舉暴發無之様更列藩へ御布告有之候に付追々攘斥之御所置可有之義も存候處至今日未御實効も不被爲立如何被爲在候と奉窺望候處 當節大樹公にも上洛列藩參集 國是御一決齊懲之 御廟算被爲在候義と 恐察仕候得共萬々一も期限御遷延に相成候は、掃夷之機會も被爲在間敷

積年 叡慮御貫徹之時無之且人心之方嚮も不相立加之萬民之疾苦に至り邦内瓦解と相成候は、禍亂不可請^下遂夷賊術中に陥振古所無之大耻を被爲受 神州腥羶之汚俗とも可相成と泣血悲嘆仕候蒙昧意陋之身天下之重事を奉議候者多罪之至に候得共區々之情難默止胃瀆

天尊言上仕候不敬不憚之罪 御仁宥被爲垂寸志之程 聖察不堪仰願候死罪々々誠恐誠惶頓首謹言 正月 六卿連署^{四つ折}上^{包折}

右丹羽河村兩人上 京之上直様關白殿下へ差出候處先歸宅差控居候様との事にも三日振に最早御用無之由にも長州へ引取候様被 仰出至る都合も宜今月^三十日長州へ下着候事 (元治元年)

一二 加賀藩主國中布告之事

方今不容易時節に付 皇國之御爲深致痛心先達を存込之儀公邊へ再應致

建白候儀も有之候處兎角 公武御一和之御模様不被爲在右よりして不容易次第實に寢食不安候に付身不肖に候得共彌建白之趣意令貫徹 公武御間致周旋候付尤此方并筑前共上京可致筈に候得共此比兩人共氣配不相勝候付先京都へ家老共差立候間各に於ても其心得を以厚心込專勤 王攘夷を本意と致し心中を盡候所存に候夫に付異見も有之候得共畢竟 皇國之爲を存候事に決る兎角上下一致不致るは不相成儀に付先達を軍制之儀申渡候通に候條彌其旨相守忠勇を勵可申様致度候此段一紗へ可申聞候

正月十五日 (元治元年)

一三 水戸武田某小川館之徒に與へし尺牘之事

此度義生入館以來謹慎威武研究攘夷之志相勵み一段之事感入申候併從來輕動等無之様尙更深深力^{盡力}有之度事

甲子正月廿四日

武田耕雲齋

一四 世上流布 勅諭と云もの事

嗚呼方今形勢如何と顧る中内は則紀綱廢弛し上下解體百姓塗炭に苦む殆
んと瓦解土崩之色を顯し外は驕虜五大洲之凌侮を受けて正に并吞の禍に罹
らんとす其危き事實に累卵の如又眉を燒か如し 朕之を思て不能寢食喉
に下らす嗚呼汝夫これを如何と顧や是則汝之罪に非ず 朕か不徳之致す
處其罪 朕か一身に在り

天地鬼神夫 朕を何とか言ん何を以てか

祖宗に地下に見ゆる事を得んや由て思へよく汝は 朕か赤子 朕汝を愛
する事子の如し汝 朕を親む事父の如くせよ其親睦の厚薄天下挽回之成

否に關係す豈重きに非すや嗚呼汝夙夜心を盡して天下人心之企望に對せ
よ夫醜夷征服は 國家之大曲也遂に膺懲之師を興されば不可有雖然○
○之策略を議して以 朕に奏せよ 朕其可否を論する事詳悉にして以
一定不拔之國是を定むへし 朕又思へらく古より中興之大業を成んとす
るや必其人を得すんは有へからず 朕斤百武を見るに苟も其人有と雖當
今會津中將越前中將伊達侍從土佐前侍從島津少將等之如きは頗る忠實
純厚思慮宏遠以て 國家之樞機を任するに足へし 朕之を愛する事子の
如し汝之を親□計れよ 朕汝と誓て衰運を挽回し上は
先皇之靈に報し下は萬民之急を救はんとす若怠惰にして成功無れば殊に
是 朕と汝の罪也天地鬼神夫是を殛すへし汝勉旃々々

文久四年正月廿一日

或曰此 勅書半は 大御心に非す具眼之人は拜し見て知るへし奉疑者を
忠義とすあなかしこく

一五 島津三郎藩士共へ諭書之事

夷賊征服之儀從來之 叡慮に被爲在候得は今般 官武御一途之根軸被爲
立 宸翰を以被 仰渡候趣も被爲在候上は幕府は勿論列藩一同盡死力不
奉安 宸襟候は臣子之分難相濟儀と存候就る征夷之策略に於て方今之
急務たるは攝海之要港守備嚴重に相調ひ候儀に可有之存候間聊愚慮之趣
幕府に建言致置候尤時勢之急務録上候様との趣先達申渡置候得共猶又右
攝海守禦之術に於ては成敗之所分人命之所係にて實に以至大至重之事に
付方略之次第存寄有之候は、不差置可申出候當時於諸藩開鎖之說紛擾い
たし候哉に相聞甚に至りて我藩を開港說と唱候由に候得共決して可答に
非す又一時愉快之說を聞可動に非す我等趣意は一昨年來致持論候通我に
十分之武備を設け萬古不易之征夷□行下度との着眼に 神州之安危に

致關係候御大事之時に當り數年之

叡慮に奉基大策を見居候上は天下後世迄も致貫徹度徹志に候條幾重にて
取違無之様爲心得申聞置候事 子二月 (元治元年)

探襍錄卷七

一 大樹公右府御拜任之事 附 參 內等之事

先月廿日 勅使二條御城へ參入御對顔有之候處格別之 思召を以右大臣御轉任之儀可有 宣下旨被 仰出候一體御辭退も可被遊處厚 叡慮之御旨も有之候に付御領掌被遊翌廿一日御 參 內以前 宣旨被遊御頂戴候此段申達候様御意に候右之通從京都表被仰下候間爲心得相達候 二月 公方様益御勇健被成御座爲御上洛并年頭御祝儀先月廿一日巳刻御參 內御對面 天盃御頂戴且又 親王 准后へも被爲入御作法首尾能相濟御機嫌不斜候段從京都表被 仰下候間爲心得相達候 二月 (元治元年)

二 中外問對に付、之優柔醜夷之傲慢可觀事

甲子二月立山御役所に於て英軍艦船將キンクストン外士官三人并英國士代スミットへ奉行始め支配向御勘定御目付方役々立合應接之大意

奉行 高く署したるは奉行か言也巳下做之

一先般英アルコック當港へ着船之由定る於双方尋問被致候事と被存候右者何用に而到來致候哉

船將 低く署したるは夷虜か言也巳下做之

面會は仕候得共用事儀は何共承知不仕候

一當節長州に向各國軍艦進發し候趣於貴國も同様と被存候且船數幾多期限幾時たる哉

左様に御座候私儀も各國一同進發仕候得共其後れ候程も難計既英國より七丁門備をミソテ船出帆仕來月には進發可仕と承候

右長州一件に就るは貴國政府より我政府へ被申立候事も有之哉

既に四ヶ月前申立置候得共今以何たる御處置も無之候間無餘儀有之仕合に相成候

右事件に就るは我政府に於ても甚心配被致既に今般大君上洛に相成候へは一度は如何と歎處置可有之勿論鎮台に於て差留候權は無之候得共各國軍艦到着之上暫時被見合候儀は出來間敷哉尤表立申談候譯には無之候

御尤之事に御座候各國軍艦相揃候は、暫時差留め候手段可有之と勘考仕候

甲子二月廿一日立山御役所に於て英軍艦船將キングストン外士官三人并英國士代スミットへ奉行始め支配向御勘定方御目付方役々立會應接之大意一應會釋畢る

今日申上候儀別事には無之先夜及傷に逢候國民右は未だ其罪人御穿鑿に不相成哉其儘に而は難差置候に付其趣を備細に提督へ相達申置

候

承知いたし候此方に於ても不怠穿鑿致居候得共何分手掛無之大に心痛
之次第に候右は手腕を切放候得は治療相叶候趣被申居候處彌被切放候
哉

左様に御座候既に切放申候乍併生死之儀未だ見極難申勿論其旨も提
督へ申入候

手腕を切放候得共生活可致様先日之噂に候處左様にも難至候哉

切放見候得は寸度危く御座候其故は右刀痕彌以全愈仕候哉難保甚掛
念仕候

幾時切放され候哉且右手負人年齢は許多にして妻子にても有候哉

四日前に切放申候年齢は凡廿八歳より三十歳迄と勘考仕候唯多所頼
は同人儀至て健康之性質に候故斯く手荒き治療も施し候儀出来今に
殘喘を保居申候不然時は遠く死亡致し居可申候生土は英國にして妻

子は無之唯從兄弟有之而已に候兎も角も御穿鑿之儀乍此上早々罪
人法網に入候様御取計之儀相願候

土地之者に候得は旦夕に罪人相分り可申候得共候領之者と勘考いたし
候承知之通封建は我國に而諸侯各其人民を司牧いたし居候得は寸度手
數相掛り心痛いたし居候乍併罪人法網を被免候は國辱之事なれば如何
にも心力を盡し不遠其罪人を刑罰致候様取計可申候

諸侯にて銘々土地人民は擁護致居候得共上とする所は唯一人に候得
は敢て探索之出来すと申事は有之間敷存候

勿論候領之者たりとも有罪之時は罰するは天下之大法に而姑息致し候
譯には無之唯方々候領多人數に而旦夕に取調行届不申と申事に候

此事件之御處置は鎮台に屬し候哉大君に屬し候哉

裁奪處置するは鎮台之職也是を命するは大君なり今大君之れを命し鎮
台之を奉す其元は一也區別すへからす

此事件備細に提督へ申立候就るは於貴下御差支之筋無之哉
毛頭差支無之候

貴國に於ては數度及傷之儀有之候得は其儘にも難捨置其故申遣候
先夜兇人取殘候草履右は崎地之人々着用とは大に違ひ居候得は是を
以手掛りとして穿鑿可相届被存候

尤之事に候去ながら右草履は崎地にては不相用と申而已に他所之土
官はいつれもこれを用ひ殊に目印も無之上は一草履を以て手掛りには
難致候

然れとも其場へ殘し置候草履あれは夫を以如何とか目當之吟味にも
可相成と被存候

吾國も罪人を隠し候は法禁にて殊に事件他國に係候上は尙嚴重に取扱
候乍併何分封建之故歟人別改め調へ候事等郡縣之如く速には難届候

英國は日本に比し候得は戸口萬倍致居候得共罪人を捕候は至る速

に候

先年無人島に於て一の亞人ありて英人の妻を竊み金銀も共遁去サント
イス島に潜居候處漸く七年を経て始て是を捉へ候由然る時は遅速は同
様にも無之穴勝英國計り速也と申譯も有之間敷候

近々英國より海陸之兵卒到着之由實に候哉

左様に御座候是は何處に對し戰爭致候儀駝と承知不仕唯提督之命に
隨ひ來り候得は同人之在所へ屯泊可仕候右一件英人疵請アドミラー
ル承候は、當地へ相越可申哉も難計可相成は其前右之件々本人相知
れ可申様致度ものに御座候

委細承知いたし成丈手を盡し速に吟味を遂候様夫々可申達候二月廿一
日 右長崎住人玉名純之助より差出候

三 幕吏勝某等長崎へ下向之事

御軍艦奉行並勝麟太郎様御目付能勢金之助様支配調役並小松右藤次御徒目付大木六郎村上與七郎御小人目付中山七太郎小澤鍋太郎去廿三日長崎御着に相成候段申越候此段被及御達可被下候以上 子二月 (元治元年)

四 長州征討之幕命に付我 澄良公子御建白書之事

今度越中守へ被爲頂戴被 仰付候御封書之趣内々兩人へ被 仰聞實に武門之冥加越中守は勿論於兩人も面目之次第奉存候熟々長州之事情を觀察仕候に近來洋夷來港太平久とは乍申任求要津を被開要地を被借與候等の儀御座候處より貧夷追日る忌憚所なき勢に成行を諸邦之敵愾憤怒に堪兼遂に櫻田西丸下變事相生浮浪之徒虚に乘し 公武之御間殆御間隔之姿に相成天下之人心次第に紛亂仕候儀を大膳大夫深く慨歎致し最初

皇國公武之御一和を周旋仕候主意と相見候處不圖も今日之形勢に相成候儀は乍恐 公武御双方之御所置を不被爲得候處人心を被激諸卿は過激之徒に擁せられ大膳大夫は激烈之臣に擁せられ激烈之臣は浮浪之過激に擁せられ浮浪過激は相互に切され勢不得已展轉相激し件々亂暴之仕方によひ候儀と奉存候已

天朝より大膳大夫非常之昇進を被 仰出其後暴發之砌は 御譴責こそ可被爲在歟と奉恐察居候處却る被賞剩へ監軍使をも被差立一旦は九州之末々迄動搖仕候程に御座候處其末去八月十八日前後を以 叡慮之眞偽を相辨候様被仰出候得共御書達等迄には長州一國疑惑解兼舊冬に至り井原主計を以奉伺候通に御座候間此節 公武御合體御委任被爲在候とて 將軍様より直に被及御沙汰候儀何程に可有御座哉彼より矢張 天朝之重命を固守仕居十八日已後却る 叡慮を矯候儀にも可有之哉と論說仕候運には決して至り兼可申奉存候間今般御取固めに相成候御趣意は 朝命を以

宰相父子之内歟又大臣之内にも大坂あたり迄被召寄先般之監軍使へ對候程之重き勅使にも被差立候る明白に御諭被爲在此已後屹度台命を奉候様被仰出御請迄之儀は是非

天朝之御所置を御願上げ被爲在度御儀に奉存候右之御筋に相成候るも違背仕候は、所謂天人所誅にも假令御伐討被仰出候とも有誰る否と存候儀も有御座間敷左無御座候るは大膳大夫初二三之大臣十八日後之叡慮を奉候心得に候共一國中を示諭仕候儀何分力に及不申不本意戰爭之埒にも至り可申其響より如何成内亂を被開候も難計洋夷窺窬之折柄實に皇國之安危に係り深く奉懸念候尤朝廷より大體之御取扱相濟候上は將軍様より一切御引受に相成七卿之面々勝手に國許へ連越候儀は申迄も無之御役人暗殺公義并薩州之軍艦に暴發等の事件一々御察討に相成候は、究る暴臣浮浪之仕業に於大膳大夫も奉恐入候種目を以御斷申出に可有御座其程に應し相當之御懲戒御座候儀順路之御運に事柄も速に落

着可申歟と奉存候右様之境は重々御廟算被爲在たる儀とは奉存候得共右之御所置次第不容易筋にも成行可申甚以案勞仕候御懇命奉蒙り候私共折角存候儀其儘に黙止仕候は却る奉恐入候間不願憚内々言上仕候以上

二月 (元治元年)

長岡澄之助

長岡良之助

五 或人從囹圄中送妻手簡之事

我等このたひ皇國の御爲御國の御ためと存し込日夜寢食を忘れ親に離れ奉り妻子を捨候て身力をつくし候處官府の御不審をかふりかくのこたく囚繫と相成申候誠に恐縮之事共に候君上は第一先祖父母に對し奉りいとも恐く候去ながら天地に向ひ神明に對し候るは聊も耻候事は無之

候併我ら知見のたらざる所より或は過失も候らはんか其過ちに依て我身如何成行候とも是天命の然らしむる所なれば決あなけき悲み候へからすむかしより精義の士程薄命なる者は無之候我ら賤き身にたとふへきには候らはねともかしこくも和氣の清丸と申御かたは弓削の道鏡帝位を窺し時にあたりて御寶祚に大功有御かたにて候へとも當時は穢丸と呼て島に流されたまひしか後世の今に相成候は天津日とともに其忠誠を照し玉ふ遠くしては元弘建武の昔公卿の御方には北畠親房顯家顯信藤原の俊基資朝の卿を始め奉り武士にては新田義貞楠正成行菊池の武重武光候など皆々朝家之御爲に其身は更なり其國も其子孫も南朝とくもに亡ひたまへり今日に至りては其忠誠日月と光を競ふなり足利氏の天下の武將になり玉ひしといへとも今日にいたりては賊名をうけ後の世のあさけりとなり玉ふされは人は一代名は末代と申ものにて候さて又近くしては戊午の禍にかゝりし吉田寅二郎安島帶刀鶴飼吉左衛門父子梅

田源次郎など又長岡宿にて死去いたし候人々庚申上巳の節井伊を討取し十七人の大關森山杯と申人々壬戌の春伏見にて討死いたし候有馬新七田中謙助列を初國の爲天下の爲に身命を盡し候人々かしこくも朝廷より下し文給りて子孫をして祭を厚くし長く鬼神をして血食せしめ候様勅旨賜り誠に冥加にあまりていともかしこく候我ら賤き身を以て古の名將賢君々子碩徳之人々にたとふへきには候らはねとも其國に盡し朝家に盡し候志は誰にもをと申へき我らも壬戌の春よりこのかた我身のあるをはしらすして只道のある所嫌疑をさけす不憚忌諱或は不測の淵にのみ或は虎狼の窟を踏候て微志を盡し候故歎かしこくも朝廷より學習所御用懸被仰付賤き名をも雲井に聞へあけ或は石清水御幸の供奉被仰付其時着せし布衣其儘賜り或は勅使の供奉被命候て身にあまるたまものとも下し賜り我ら身にとりては其ありかたき御惠み誰人にもまさりぬへし我ら子孫たらむものは我志を彌繼々に繼て千萬年の御德澤

と我此御大恩を奉報へき也そもく我邦君は足利氏の御血脉に渡らせた
まふまゝ我ら幼少よりの志は微賤の身たりともいへとも若天下事あらむ
ときは朝廷の御爲に第一の御忠誠被爲盡乍恐御家祖足利氏の穢名を償
せられ御忠誠の御芳名を千萬世に揚させ給ふ様身命あらむかきりは盡力
致候心底に候處一昨年以來朝廷之御變動に付是そ我等平生志し候時節
と存し同志申談し權門を不避勢家を不憚君臣の大義を以建言等仕候處固
り君上にも賢名にましませは早く其御志し被爲在既に今日のことく爲
皇國盡力被遊候間我ら素願も已に達せり我此度國に歸り候て京都正邪之
辨等申上候志しに候處かくのとき繫囚となり志相達し不申遺憾不少候
得とも是も運命に候へは可致様も無之候何卒我子孫たらむものは我志を
相繼し我邦君をして中臣の鎌足公の如くならしめ新田楠菊池氏の上に
たち給ふ様忠誠盡力可致候是朝廷へ對し候ても忠誠の第一にて候也汝
女たりといへとも我妻なれば能々我遺訓を相わきまへ人にゆひさゝれぬ

様に子共精々我遺教を相守り國の御爲天下の御爲屹度相立候様養育之程
吳々御頼入候也汝の身にて國一の忠義我へ之貞操はこれにます事候はし
昔楠正成討死し玉ひし時御子正行十三歳になり玉ひしか其母いとも賢こ
く渡らせ給ふ人にて父君之遺教を能々守り玉ひ厳しく教育し給ひければ
廿五歳にて打死ましめて父君に劣らぬ忠義之名を今の世までも輝し玉
ふ賤しき我等か身にたとへ候もをこかましく候へとも楠母之迹を學ひ玉
はん事のみ頼入候也何事も々々加屋益坂などへ御相談有之度候若加十郎
御教育届兼も候は、越鳥坂へ御頼被成候か又は住江小坂方へ御預可被成
候この兩家は能く士道を守る家の習しに候へは宿に置候よりも却て身の
爲と存候御母様御事いか計御悲可被成これのみ心にかゝり候兄弟共に御
孝養奉盡候事もなりかたくかゝる身と相成候ては不孝の罪いと恐く候併
ながら古より忠ならむとすれば孝ならず如何にともすへき事あたはず何
とそそもし初子供我らにかはり御心を慰可被申吳々頼存候我等も武運強

く再び歸り候は、芽出度孝養可仕候けかも漸々快く相成五月比にも相成候は、歩行も出來可申御氣遣無之様存候立花越鳥坂へも御變り無之哉宜敷頼入候何事も々々筆にまかせ心にまかせ不申候かしく

二月十一日 (元治元年)

との

信 道花押

六 筑前侍從慶贊朝臣幕府へ建議之事

御國是之儀并長州御處置振等鄙意無覆職早々建白仕候様被相達奉謹承候重大之事件輕易に難申上候へ共長州御處置之儀別々御急之御事柄と奉恐察候間愚意之趣不避斧鉞吐露仕候根同州は勤王攘夷之原意より奮發仕候儀に候得共頻に詭激之論を相立幕府を輕蔑致し別て昨年來之舉動御威光にも相拘り候付嚴敷御査問之上致峻拒候に於ては六師征討可爲御相當

との論も追々承候へ共篤と勤考仕候處方今海寓之人心未及一定漸近日に至る公武御和合水魚之御親被遊候御手始且は外夷之騷擾も難計御座候折柄御滅却と申に相成候は同州は不及申諸藩も人心沸騰仕或は不逞之徒庶民を致煽動皇國爭亂の端に相成可申歟と深焦思仕候儀に御坐候其上頃日諸藩へ幕府より封書被渡候に付は長州御征討之儀と一統へ流布仕忽同州へも相響き可申然時は一往之御糺も無之直に御征討と相心得詭激之情態増長致し終には正義之臣も不堪殘懷過激之徒へ黨與仕國之存亡をも不顧必死之覺悟に籠城可仕體勢に至り可申歟と勤考仕候就右先一應末家并家老臣之内早々被差登勅使幕使を以是迄之心得御訊問之上理非分明に方今之御趣意をも御懇説に相成大膳大夫父子申合速に御請申上候様被仰付追々悔悟之徵顯し過激之罪を奉謝に於ては出格之憐愍を以社稷無別條様寛典に相成之儀御上策歟と奉存候一體は勅命を被請幕府之處置當然之儀に候へ共一途に叡慮遵奉し昨年夷艦掃

攘之魁仕忝も 叡感被 仰出も有之監察使をも被差下且去五月十日攘夷
期限之被 仰出本懐之餘り今以去八月十八日以前之處内實之 叡慮との
み存込罷在幕府より何程懇説御座候も過激輩等承服仕間敷哉に奉存候
に付此節之御處置は

勅命を以被 仰出候方可然愚考仕候
右之通御詰問被遊候も悔悟不致奉對 公武不逞之暴論等於申上候は違
勅之罪難遁候に付其節御征討被 仰出候も可然哉に候へ共相成丈は悔
悟之御風論被 仰出候御事歎と奉存候御下問とは乍申熟考も不仕粗漏に
申上候段宜御取捨被爲下候様奉懇希候御國是之儀は尙又再三熟考之上可
申上誠惶誠恐頓首々々

二月廿三日 (元治元年)

松平下野守慶賛

七 松平科保肥後守參議辭退先祖正之朝臣へ御贈官願文之事

不肖之臣容保再參議推任之 特命を降し賜り去秋之舉動更に 御推賞被
下置臣之寵策無限感泣何止然共 臣敢て謙讓を爲に非す俯思ふに立法傳
實に正之より基き世々遺風を守て周旋仕幸に 臣身に及て始て
輦轂之下に奉事し時之不安に遇 嚴命を奉し微力を盡し事を得るものは
其源は正之志に御坐候於是重て奉瀆 聖聽其咎固より免れざる儀に奉存
候鄙心愈不能安伏て願は山海之洪量を被爲垂猶 臣の微志を矜憐し臣に所
賜之官を移して正之へ賜らは 臣之冥加幾許倍し且恐多も其人柄に於ては
相當可仕哉と奉存候間兩犯尊嚴奉祈願候頓首々々

子二月 (元治元年)

左中將臣 容 保上

八 森井某江戸府下時勢報知手簡之事

一英國アルコック來著に付井上閣老横濱出張應接有之候處渠より國王の命を蒙り候一條は大樹公御上洛御留守に言上仕候も迎も御返答難出來と一切閣老へは不申出アルコック一分之存意を申候には最早攝州大坂兵庫越後新潟之三港御免しに相成候よりは何年に相成候それをも御開無之殊に上官ミニストルとは各國共に江府内に住居御許に相成候へ共是以人心不持合とて御斷之末遂に御殿山之商館も御燒拂被成其上横濱鎮港と申儀は餘り御勝手之御振舞にては無之哉と恨事を申候由全體王命を蒙り罷出候趣意は別文之三港是非當年より開と申所存之由に候へ共其事は不申出由

一舊冬廿九日外國へ被差出候使節船アルコック清國定海港に於出逢使節之人々を遮り留め申候には迎も本國へ御出被成候とも國王開入不申

是非御引返し被成候と頻に勸候へ共聞入無之由然處横濱來著後各國ミニストルを大にアルコック罵り辱め候由其譯は日本より使節被差出候を拒止め不申故と申事右に付彼等之中議論兩端相成已前より參居候者は當時日本之形勢熟察致し候に迎も此三港を開候儀を申向候とも行れ不申必事之破れと相成との説に於アルコックも近來大に議論屈けたると承申候併實情は未だ聞取不申候

一使節船定滿より書狀到來致候には此度アルコック罷出候儀は程に寄候るは御心配にも相成可申と認有之たる由承申候

一水府は先便にも言上仕候通長州説之者國權を取最早當君幕府に構不申只々天朝之命を奉して攘夷致の論近來愈盛に相成諸方之浪士多勢集り近國へ金子を募りに出候者不少且神武館と申學校共潮來之方に築立候由惣體浪士之まかなひは豪農商に強申付置候由水藩人嘆息致し話仕候彼等之趣意は潮來を本城とし玉造水一を本丸と致す覺悟之由當君

は御在府少しも御手は出不申候

一仙臺侯當月廿日御出府に相成申候去秋比より京師關東二方より御召に相成居候處此度は公邊より御留守御警衛被仰付又勅命も同所江戸へ罷出候様被仰出候に付御出府御座候由

一昨廿四日御在府列候田安御屋形に惣御召出し今度大樹公御參内之節宸翰御下し御座候御寫拜見被仰付且長州使問之上承服不致節は征伐之御覺悟と申事も内々御沙汰有之候由最早長州征伐之御様子と申事江戸内風評致居申候

一安井忠平は公邊御代官被仰付候へ共何方へ參候歟相分不申風評には猶轉職致し要用之職被仰付抔も沙汰致候へ共是以實晴相分不申候其他京師之事情は承居候へ共彼方より申上たると奉察候間態と相省申候子二月廿六日森井惣四郎

猶々長州よりは東北列候へは無殘廻文差出され候檄文は一寸一見致候

處聊長州には罪は無之との申譯に御座候何れ次便には書付差上可申奉存候已上 (元治元年)

九 上方中國風說抄省書之事

- 一會津守護職御免相成五萬石加増陸軍總督被仰付候處此儀御受不仕候由
- 一越前春岳へ守護職被仰付候事
- 一薩州より今日上書有之其眼目は武備不充實故急速攘夷不相成攝海之防禦不充實を名とし矢張因循に航海備仕候事に幕へ畢竟阿諛し天下之人心兩端に抱かせ己れ正とも邪とも不分明之様思御文面之由也
- 一大和浪士十九人殺伐不堪悲歎候平野次郎共も此内也
- 一薩より幕へ浪華城借受仕度段願出候處御免不相成於幕府も彌薩之奸計を悟り候由

此中なる藤原保臣の歌は去年之部に可入を本書に据り別にしるさす

題しらす

藤原實美卿三條殿

或曰斯歌を
味めは感情を
涙胸一字一

大君ちゆりよまをらむ仰き見れを高天原も霞あめさ
玉の緒ち絶なはぬえねかくてよに存生とてもあそりひもなし
ぬまれをちうきよれちりと消ぬとも君よしられは嬉しからまし
玉のをよ光消あを人えらす君り守りとあらましものを
君よしえられすととも臣として臣さる道を盡さるへ姿
大君の大御あゝろをちよとさふあちふく風も我ああへよ
かくまでに忍ひくちをちそやとりのはやりあゝろと人やとりめむ
うれさきのゑるかたあさよ花鳥の色音をさへよかあちつるかな
あゝろのみ思ひこかして文机のふみを見るさへ物うかりけり
さきかけて此世の梅と散もをす待きて秋咲菊もあるかな

題しらす

藤原季知卿三條殿

或曰義氣烈々

武士ちゆふもさらなり梓弓見れもとるへき世よそ有けれ

三田尻にて

吳竹の世をまをなれと思ふのみ見りおきふしの願之けり

藤原保臣和泉守

九月十三夜長門國にて

思ひきや鹽の八百路をむたりきてのちの今宵の月を見むとち

いかよして君か誠を久かたの雲のそらに晴れたを色き

題しらす

左

近盾行云こはら三條殿の侍
近三宅左近ならん猶可尋

大空の月の光をさゆれともよよ浮雲のかゝることかな

一二 長門藩主奏議之事

謹按

二尊開闢以降

天は神也

天日嗣之知食賜堂々之 皇國三千年之今日に至初る夷虜之侮慢を受 御
國體難相立何共悲憤之至奉存候辱も
聖明英武夙に醜夷掃攘之 叡慮被爲在
天人感動癸亥之夏に至遂に拒絶期限被 仰出候に付臣領内に於て聊遵奉
之驗相立敵愾之士氣相勵
天恩萬分一奉報心得罷在候處八月十八日に至闕下變動之次第如何之御事
に候哉其原由は不奉得察恐悚之餘經來奉 勅之始末巨細申上置於國元恐
懼罷在候得共
玉座之御安危如何可被爲在哉與寢食不安日夜憂苦に罷在候抑癸丑^{降或は來カ}以○確
乎たる攘夷之
叡慮可被爲變御事には不被爲在候得共當今人情輕薄萬一於内地石敬瑭如
きは有之間敷共難申若然らは
玉座之御安危に相係候御大事奉存候に付再三申上候も恐多候得とも藤原

實美初西下之儀は全攘夷之
叡旨貫徹致度之外更他念無之由其憂國固
君之誠意不被爲捨早々復職被 仰付候は、最前確定之御國是彌以凜然相
立可申と奉存候且又臣父子去秋以來上京見合候様との御事如何之 御趣
旨に候哉不奉測候得共去八月攘夷 御倚頼可被爲遊との 御沙汰に本つ
き日夜心力を盡罷在候得共 上國之事傍觀打過候は臣子之至情不相忍
候に付父子一人上京仕乍不及抽丹誠 叡慮御貫徹相成候様仕度奉存候區
々之鄙誠 天地鬼神に質し可愧儀無御座候間乍恐 御憐察被爲降 御聞
濟被爲成被下候様泣血奉難願候 臣慶親誠恐惶稽首謹言
私末家一人吉川監物并家老一人御用有之候付大坂表迄罷出候様尤國許迄
も可被遣 勅使之處遠路之儀故大坂表迄被差遣候事故末家已下三人大坂
迄罷出 勅使御引請仕候様 御沙汰之趣奉承知候然處先達の家來井原主
計上京申付候節勸修寺殿於藤森御接待に相成候儀奉對

朝廷奉恐入候次第御坐候處此度又々於大坂 勅使御引請仕候様被 仰付候付は失敬之次第臣子之至情不堪恐懼奉存候に付僅咫尺之事に候得は入京被 差免於 闕下奉 命被 仰付候様奉願上候當今之時勢 闕下之御模様如何にも傍觀難打過段は委細別封を以言上仕候次第に私父子間上京をも御願仕度程之事に付折角被 召寄候末家其外之者共 闕下近く罷在候様格別之御仁慈を以 御聞濟之程奉歎願候以上

三月 (元治元年)

長門宰相

一三 紀伊藩主征夷府へ建議之事 三篇

松平大膳大夫父子へ御糺問之所有之萬一承服不致節は御征討も可被遊旨先頃御内意被 仰付候に付其節愚存申上候處尙又 宸翰御布告に相成罪

責暴露就中七卿誘引監使闇殺等之儀其罪固より不輕事には候得共深く當今之勢を審に仕候處夷情不可測之時に當て蕭牆之禍を醸し候儀實に以不容易事に奉存候間何分にも御寛典に御處置被遊候様仕度候古より華を以華を治め夷を以夷を打候を上策と仕候處萬一御征討之儀に相成候得は彼夷情より見候時は却る彼か上策に陥り十莊子か功は彼に被收蚌鶴之禍は自取と申物に相成 天幕之恩威共に挫け諸侯幽寒之懼を懷候様可相成歟と杞憂仕候今若彼一門初を御懇説有之一時疎暴之罪不輕と雖畢竟夷を壊し甚よりして相生候儀に却る今日之上策地をなし 天朝幕府之恩を背隣國同州と怨を結び祖先以來之儀を空敷致し 皇國之生靈を苦候段定る本意に有之間敷儀を厚御誨諭有之隣國同州にも被 仰付説解せしめ一度に承服不仕候は、二度三度に至り候は、兼る名義を主と致候國柄故承服可仕候夫にても承服不仕節は其時御處置に可有之事に御征討之儀は前以被 仰出候筋には有之間敷歟と乍恐奉存候元來防

二州之衆を待み居候事故御内意自然承り込候は、承服仕候者も承服なり
難き勢とも可相成哉就るは何卒至誠之文徳を以頑傲を感悟するを御標準
と被遊候様仕度奉懇禱候頓首謹首

三月

此度 宸翰并御受書御布告に相成候付再三拜讀仕候處 公武御一和に相
成候段實に萬世之一時蒼生之大幸不過之事と深く感戴仕此上 宸翰之御
趣意に基き早々御長策被爲在幕政御更張有之候様日夜仰望仕候抑幕政之
不張所以は 朝意を背馳致より起り 朝意不行所以は幕政之不振より起
る事にも此二之もの相待相合て内外之患氷解可仕候間謹而膺懲之典を奉
し緩急之備を嚴にしたゆみ無之綱紀振勵候様御處置有之度就るは公方様
には暫浪華城御靜坐被爲在守護職初諸有司と京地を管轄致し外諸侯は守
護を徹し封土に歸し近畿咽喉之地は往古之制倣ひ新關を設け出入を嚴に
し六十餘州各其方物貢獻に復し守護職是を掌り 禁中修繕供□に充候様

相成候得は普天之下皆天職に供し候にも明白に相成幕府匡合之威も儼然
と相成候に付 朝覲參府之外封土に安し各其領民を撫育爲致候は、 輦
轂之下擾亂之儀自ら相止可申候併道不虛行之理合に御坐候間尊 王之實
飽迄御注意被爲在表裡相應し今日に至り候所以と佗日之所深御省慮有之
度奉存候且又松平肥後守儀此度守護職御免被 仰付候得共同人家風武備
充實忠勤相勵昨年来別々公義之御爲盡力仕殊に京地形勢情態懇着致候事
故今暫當地へ被差置松平大藏大輔と同心戮力仕候様被命候得は兼而之誠
意尙又十分に相盡し萬世之御基本相立可申歟と奉存候是は曾て御定策も
被爲在候半と奉恭察候得共 宸翰御布告に相成候に付るは愚存默止罷在
候も其職掌に對し恐入候間不顧多罪尙又建白仕候誠惶頓首 三月
廟堂之神算を不辨妄に申上候段は誠に以恐入候得共何分區々之儀も有之
再度建白仕候松平肥後守儀今般守護職御免に相成候儀は深御趣意も有之
候事に奉恭察候得共先頃申上候通去八月以來天幕之御爲上下一致盡力仕

候實に不容易候處兎角巷説紛紜屢張札等も有之候趣承知仕候乍併昔子産政を○初は子産を惡候得とも三年之後に至り其政を喜ひ候由左候得は肥後守之功績も數年之後に至り候は、自然と顯れ艸野之小人も喜ひ候様可相成歟と企望仕候折柄忽ち九仞之功一簣にして空敷相成候段實に歎惜に不堪次第に御座候後世子産を稱譽致し候も實は鄭侯之風評に不感果斷委任いたし候識度實に可感事に御座候尤京地は鄭國之比較すへきには無之殊に當今之時合に當り候は、皇國之安危に關係仕候事故風俗人情に馴候者に無之は不可然歟と奉存候間肥後守儀今暫 輦轂之下に被差置候様仕度不顧多罪愚分相盡し申上候此段御憐察可被下候頓首謹白

子三月 (元治元年)

一四 備前藩主幕府へ建議之事

一 攘夷に無之は人心一致之目途無之事

攘夷之儀は數年來人之口實に致居申候儀に御座候得共素より一定之策無之輕易に可致事には無之無謀之兵端相開候儀は却て外夷之侮を醸候譯も御座候得共既に昨年

叡慮遵奉攘夷之台命被 仰出候位之儀今更御變動に相成候は物議紛々迎も一致之目途有御坐間敷人心一致不仕候は攘夷之儀は暫差置候もも今日之御政令も不被行

朝命幕威も相立間敷と奉存候間何分にも人心之御基本は御屹立相成不申候は不相叶儀と奉存候

一 三港之外猥に碇泊之夷艦は打拂候様御命之事

此儀は外夷にも御示に相成候様に候得は三港來泊は暫御差免に相成候共彼か輕侮を制候譯に、神州之御武威も相立且攘夷御奉 勅之廉も相顯可申其上追々御應接之模様に寄忽兵端相開可申候得は其期に至り

候は何れも要地之襲來も難計御座候間右之趣列藩へ御布告に相成居申候は、闔國勉勵武備相整起情之一端にも相成幕府之御權も相立可申儀と奉存候

一 鎖港之御實功相立候儀御急務と奉存候事

此儀使節歸帆之上御取懸りと申計には人々疑惑之念相止申間敷候間御拒絕相成候御手談豫め御決定諸藩拜承仕候様有御座度依る差向横濱へ相廻る交易之品々御差留被 仰出候様有御座度將又外夷に對して曲直を正し候と申論も御座候哉に候得共 天朝へ被對候は、大義に比較仕候得は輕重大小明白に相分候事に御座候間何分實効相顯候儀今日之御急務と奉存候

一 江戸御城御修理暫御差留緩々御修造有御座度事

鎖港御談判御取懸に相成應接之趣に寄江戸近邊は戰場に可相成程に御見込無御座は應接も出來不申儀に御座候間唯今以前通御普請候出來

と申様に、は、迎も博々敷御應接は有御坐間敷人心疑惑可仕候得は只々御假住居之思召に、御修理欠なりに被成置候様奉存候將又江戸御府内人戸御減少可相成哉之論も御座候由此儀は尤可然儀と奉存候將軍家御歸府無御座内早々御取懸有御座度奉存候

一 宮堂上方へ列藩之士人入込居候儀御差留に可相成事

此儀も昨年被 仰出も御座候處尙又當時相緩み居申候哉に承申候今般公武御一和萬事幕府御委任被爲在候上は御人少之御方へは幕府より御附人被差出大樹公は御下坂御懿親之御方京都へ御滞在御指揮御座候は、浮説虚論も不相起萬緒一途に出候様可相成儀と奉存候

一 列藩就國武備充實に可致候事

近來諸藩共疲弊不少趣に御坐候間各藩御暇被 仰出銘々就國武備嚴重に可致は勿論に御座候得共國力不足之諸藩へは幕府より御助力御座候様無御座候は急に行届難申廉も可有御座且御用物價騰貴不致様厚御

世話有御坐度事

一長州御處置之事

巷説に承候得は長防土民至迄一途に必死を相極居候趣に相聞候間御處置之次第に寄彌以人心を激し内亂之緒とも相成可申候間御寛大之儀は不申及素より御法憲に觸候儀は御譴責御座候共攘夷之御基本御決定にさへ相成候は、長州父子は不申及長防土民に至迄甘心可仕儀と遠察仕候間一應御糺問之上速に入京御免被 仰出候趣幕府より 朝廷へも被 仰立列藩私心を不挾同心合力仕候様之御處置肝要之儀と奉存候

月日缺 (元治元年三月)

松平備前守

一五 柳川藩主歸國之儀幕府へ書達之事

異船南海へ入津之趣長門宰相父子御不審中には候得共自然上陸戰等有之候は 皇國之御大事現前に有之候間爲加勢歸國仕候以上

三月 (元治元年)

立花飛驒守

一六 因幡藩臣土井謙藏策問之事

昔者元人贈書于我 天朝欲答之北條時宗以其辭無禮執爲不可且斬其使以嚴武備幕府有此英斷故當元人入寇之日 龜山帝願以身易國難上下和一其至誠感 神當時之大風非偶然敢問今日何爲則上下和一如弘安之時乎自癸丑有外夷之事以來諸公皆曰武備充實然後可奏攘夷之功今已十二年矣而諸公猶主張

前說愚謂自今之十二年猶前之十二年而武備豈能充實乎敢問武備充實之策
緩急當如之何防盜入家者不固守門戶而唯守堂與室余未之聞也 京師室也
浪華堂也紀阿淡之間豐豫之間長豐之間前門也而若丹則後門也不先議此數
所之守衛而獨攝海之防禦愚竊以爲非計之得者敢問諸君以爲如何有攘夷之
策然後可論鎖港無攘夷之策而徒論鎖港非與償金于夷恐難成苟償金之鎖港
則不如勿鎖且鎖一港而已則莫如鎖宮館不早鎖宮館則蝦夷今爲魯西亞之有
矣豈非可寒心乎敢問諸君以爲如何二百餘年之江戶地氣發泄無餘而人心萎
靡不振如今日矣今因大城有災宜遷都以江戶爲戰場不則雖橫濱鎖港恐難成
敢問諸君以爲如何古語曰寧爲玉碎勿爲瓦全今日天下之形勢爲瓦決不得有
全之理却爲玉有得全之理何憚而不爲之乎諸君以爲如何聖賢之謀事論是非
而不論利害攘夷之議論紛紛不決者論利害而不論是非也且論利害也非真知
利害者諸君以爲如何立國之道在強而不在大
皇國之在五大洲中固不可謂大然自古不受外侮者以其強也今日之急務莫如

急于強國之策強國之策當如之何昔者周之衰也楚子臨周境問鼎之輕重大小
王孫滿雄辨以却之今醜虜之無禮無義豈特楚子之比乎乃如今日我屈于徒而
不止則他日虜臨畿內問 三種神器之大小輕重愚謂雖百王孫滿決不能却之
矣敢問諸君能却之否近日有外夷襲來于長州之說苟在 皇國中者誰忍傍觀
坐視乎如聞有曰宜使外夷伐長州者余未知其真僞敢問諸君有此理否

一七 米澤藩主假領之民心糺明候樣幕府へ願書之事

私御預所羽州置賜郡屋代郡取扱方私領同様被仰付度旨奉願候處去亥二月
中願之通被仰付難有仕合奉存候然處民心不居合松平陸奥守領分へ立越彼
是申立候由に付公儀御苦體不相成様内分を以相濟申度陸奥守と相談之上
双方向役之者立合種々教諭相加候へ共更に承服不致當惑之次第に御坐候
依之御事多當節恐懼奉存候へ共御威光を以御糺明被成下度奉存候此段奉

願度候以上

三月七日 (元治元年)

上杉彈正大弼

一八 大洲藩主幕府へ建議之事

此度御國は見込之處建白可仕候様之御達奉謹承候雖然暗愚悍識之私如此重大之御事柄中々以可申上力量無之候へ共千慮一得之至に従ひ不願斧鉞之誅奉獻野人之芹候凡國家之安危兵之勝敗は人心之和不和に有之候處戊午以來於 朝廷幕府之御間柄御異論も有之哉に承及申候御異論有之候は第一御國體にも關係仕且は天下之人心不和之基本とも可相成哉と深奉恐懼候脱あるカ近比水魚之御親み有之候由承竊奉感喜候猶此上 朝旨御遵奉被遊人心御歸向候様之御處置奉仰願候且於大樹公乍恐今暫御國是一定人心一

和仕候迄は京攝之内御滞在被遊度奉存候近來天下之諸侯抱危疑之心如踏薄氷罷在候殊に於長藩は去八月以來過激之舉動有之候に付入京御差止に相成候其罪科之儀相辨不申候へ共眼前洋夷之大患を差置於御國內異論有之候は人心益動亂仕候何卒出格之思召を以御寬典に相成速に御召寄情實御尋問有之候は至當之御處置有之度候浪士輩嚴敷御吟味有之候は却は死地に陥り多少之大患を醸成候も難計奉存候此輩從來慷慨敢死之士既に父母妻子に離別爲 皇國拋身命候者に御坐候間是即 皇國之元氣御坐候中には御制禁を相犯疎暴之舉動も有之候へ共畢竟 御國體之廢墜を悲み洋夷之猖狂を惡候赤心より激成仕候儀には亂臣賊子と不可同視哉に奉存候餘り切迫候は和州但州等之異變又々起り可申候何卒當時京攝之間に潜居仕候者御呼出に相成攘夷之先鋒被 仰付候へは感戴之餘り奮前勇往可致報効と奉存候昨來天下之諸侯陸續と京師に御召寄に相成候儀は御國是御一定之御爲と奉存候乍然京師迄は遼遠之國も有之且趨從多分召

連罷登候に付冗費不費必用之軍備は却手薄に相成下候何卒御用濟次第速に歸國被 仰付寸分之國力を相養緩急之節忽御用に相立候様之御沙汰有之度候是亦懷諸藩和心之御策略哉に奉存候近來京師并諸國物價騰貴仕闔國之諸侯遂に困迫必死之地にも陥り可申何卒罔利之姦商を嚴敷御吟味有之度候左候は、人心一和可仕候

右申上候條件は大綱相立諸藩一和仕候上斷然と攘夷御一決に相成上は奉安 叡慮下は天下人心之望に従ひ以六十餘州之全力御一掃被遊候得は皇運御回復は不及申幕府之御武威も區宇に震暉可仕と奉存候愚昧之私敢言仕候も恐入候へ共赤心御恕亮御探擇奉願候誠恐誠惶頓首再拜

子三月 (元治元年)

加藤 出羽 守

一九 澄之助之君へ自 天朝御賜之事附從幕府御刀御拜領之事

長岡 澄之助

爲越中守名代上京長々滞在御警衛殊勤番等被仰付苦勞に被 思召候今度御暇に付 賜之候事

御末廣三本御絹五匹

三月廿四日 (元治元年)

昨年來厚心配彼是周旋之段致満足候歸國之上存付候儀は必申越候様頼申候

三月廿四日 (同 年)

右大樹公御坐間に御懇之御意御刀御手自被授之

探襍錄卷八

(原探襍錄 壬戌春 夏ノ部 四)

一 斬奸趣意書

申年三月赤心報國之輩御大老井伊掃部頭殿を斬殺に及候事毛頭奉對幕府候而異心を挾候儀無之掃部頭殿在執政以來自己之權威のみを振ひ奉蔑如天朝只管戎狄を恐怖いたし候心情より慷慨忠直之義士を惡み一己之威力を示んか爲に専ら奸謀を相廻し候體實に神州之罪人に御座候故右等之巨奸を倒候は、自然幕府に於て御悔心も被爲出來向後は天朝を尊み戎夷を惡み國家之安危人心之向背に御心被爲付候事も可有之と存身命を抛及斬殺候處其後一向御悔心之御模様も相見不申彌御暴政之筋のみに成行候事幕府之御役人一同之罪には候得共畢竟は御老中安藤對馬守殿第一之罪魁と可申候對馬守殿井伊家執政之時より同腹に暴

政之手傳を被致掃部頭殿死去之後も絶る悔悟之心無之のみならず其奸謀詭計は掃部頭殿にも超過し候程之事件多々有之兼る酒井若狹守殿と申合堂上方に正義之御方有之候得共種々無實之罪を織して天朝とも同腹之小人のみに致さん事迄相謀り萬一盡忠報國之者烈敷手に餘り候族有之節は夷狄之力を借可取押との心底顯然にて誠に神州之賊共可申方に候故此儘に打過候は奉惱 叙慮候事は不及申於幕府も御失體之御政事のみに行成千古迄も汚名を被爲受候様に相成候事鏡に懸て見るか如く不容易御儀と奉存候其上當時之御模様之如く因循姑息之御政事にて一年送りに被爲過候は、近年之内に天下は夷狄亂臣之物に相成候事必然之勢に御座候故旁以片時も寢食を安し難く右は全く對馬守殿奸計邪謀を専ら被致候所より差起候儀に付臣子之至情難默止此度微臣とも申合致斬殺候對馬守殿罪狀は一々枚舉に不堪候得共今其一端を舉て申候得は此度

皇妹御縁組之儀も表向は

天朝より被下置候様に取繕公武御合體之姿は示し候得共實は奸謀威力を以て奉豪奪候も同様之筋に御座候故此後必定皇妹を樞機して外夷交易御免之

勅諭を強て申下し候手段に可有之其儀若しも不相叶節は竊に天子之御讓位を奉讓候心底にて既和學者共へ申付廢帝之古例を被爲調候始末實に將軍家を不義に引入萬世之後迄も惡逆之御名を流し候様取計候所行にて北條足利にも相超候逆謀は我々切齒痛憤之至可申様も無之扱又外夷取扱之儀は對馬守殿彌增慫慂丁寧を加何事も彼等か申所に從ひ日本周海之測量之儀迄指許し皇國之形勢委敷彼等に相教近頃は品川御殿山を不殘彼等に貸遣し江戸第一之要地を外夷共へ渡し候は彼等を導て我國を取しめ候も同前之儀に有之其上外夷應接之後も毎々差向にて密談數刻に及ひ骨肉同様に親睦致候而國中忠義勇憤之者をは却る仇敵之如

忌嫌ひ候段國賊と申も有餘之事に御座候故對馬守殿長く執政被致候は、終に

天朝を廢し幕府を倒し自分封爵を外夷に請候様相成候儀明白之事にて言語同斷不届之所行と可申既に先達而シイボルトと申醜夷に對し日本之政務に携吳候様相頼候風聞も有之候間對馬守殿存命にては數年を不出して我國神聖之道を廢し耶蘇之邪教を奉して君臣父子之大倫を忘れ利欲専らの筋のみに陥り外夷同様禽獸之群に相成候事無疑微臣共痛哭流涕大息之餘り無餘儀も奸邪之小人令斬殺候上は奉安

天朝幕府下は國中之萬民共夷狄と成果候處之禍を防候儀御座候毛頭奉對公邊異心を存候儀には無之候間伏而願くは此後之處井伊安藤に奸之遺轍を御改革被遊外夷共を攘逐して叡慮を慰め奉り給ひ萬民の困窮を御救ひ被遊東照宮以來之御主意に御基き眞實に征夷大將軍之御職任を御勤遊され候様仕度候若も只今之儘にて幣政御改革無之候は、天下之大小名各

幕府を見放候而自己々々之國相固候様に成行候は必定之事に御座候外夷之御扱さへ御手に餘り候折柄右様に相成候は、如何御處置被遊候哉當時日本國中之人心市童走卒迄も夷狄を惡み不申者一人も無之候間萬一夷狄誅戮を名と致し旗を揚候大名有之候は、天下は大半其方に靡き候事疑無之實以危急之御時節と奉存候且

皇國之俗は君臣上下之大義を辨し忠烈節義之道を守り候風習に御座候故幕府之御處置段々

天朝之叡慮に相反候處を見請候は、忠臣義士之輩一人も幕府之御爲に身命を抛候者有之間敷幕府は孤立之勢に相成果可被遊候夫故此度之御悔心有無は幕府之御興廢に御係り候事に御座候故何卒此儀御勘考被遊傲慢無禮之外夷を疎外して神州之御國體も御威光も相立大小の士民迄も一心合體仕候而尊

王攘夷之大典を正し君臣上下之誼を明にまし々々天下と死生を俱に致し

候様御處置希度は是則臣等か身命を投ち奸邪を殺戮し 幕府要路之諸有司
に懇願愁訴する所の微忠に御座候誠惶謹言

かそいへの育し身をも君の爲

まのゆるち代々乃惠おもるは

豊原邦之助

平 親忠

(文久二年)

二 安藤對馬守より届書之事

今朝登 城懸坂下御門下御番所手前に狼藉者鉄炮を打掛七八人程拔身
を以左右より駕へ切掛候附供方之者防戦いたし狼藉もの六人打留其餘之
者共は逃去申候拙者儀も捕方指揮いたし候内少々怪我いたし候に付坂下
御番所に手當いたし候へとも出血等も有之候上供方はしめ手負之者も

有之候に付相糺追ふ御届申達候

正月十五日 (文久二年)

安藤對馬守

供方手負

深手

原田喜兵衛 小薬平次郎 松本鍊五郎 齋藤勇之介 馬澤幸之介

浅手

友田兵藏 上坂大五郎 村上秀二 押方萬造

右之通に御座候

狼藉者之方

三島三之介 豊原邦之助 兩刀に勤き三十八ヶ所疵 細倉忠齋 吉野政助 相田千之介 三十位

浅田磯助 三十位

右之通即死人懐中名前有之候付相知せ申候

三 在關東人來狀

今朝内櫻田桔梗口外に安藤對馬守行列に左右より乗物を目懸鉄炮三發打懸直に八九人計拔連候も切懸候處多勢に被支候故歟仕懸方六人即死跡は行方不知立退申候由被仕懸候方は四人之即死或は壺人共いふ手負數多有之由右騒動に付乗物を守護し一旦は自分屋敷桔梗口迄壹丁餘有之候よし門前迄引返候由之處騒動靜候も後供頭より下知を傳へ此儘に引取候も後日之申譯相立不申込遂に乗物を桔梗口迄昇込せ候之由其跡より堀出雲守登城有之候處乗物之内より挨拶杯も有之其儘登城之筈に候得共乗物損候に付乗替候も登城可有之込一と先歸邸直に供廻り觸候も俄に所勞之趣に登城延引に相成たる由是は畢竟主人之無恙を示さん爲之不得已之一策と奉存候對馬守は手疵三ヶ所鬘先肩先脊中と申事候得共是ハ實否相分不申候負候由淺深且玉疵歟刀疵歟之處は相

分不申候得共込も存命は六ヶ敷方と相察申事に御座候右唯今承申候に付隨聞書記得貴意申候猶追々御注進可仕候惜哉櫻田之神速なるに不及可恨々々併敵に虞不虞あり時に利不利あり成敗を以不可論何様衰世之美事可歎々々

正月十五日薄暮於□窻之下認之 (文久二年) 國 安

封廻狀 一橋附

一通り御尋之上揚屋へ入る 山本繁三郎

戸田越前守家來

大橋順造

大橋順造養子

大橋 燾 司

松本 騏 太郎

右於黒川備中守役宅淺野伊賀守立合備中守申渡有之候 正月十五日

右之子細相知れ不申候得共櫻田狼藉者體に風聞有之候由

四 小河一敏祝詞の件

掛卷毛畏伎

大御神等乃宇頭乃御前仁忌麻波里清麻波理謹美敬比畏美畏々毛申寸近幾
年古路武士乃道衰邊内波蒼生苦美惱美外波夷等乃荒備來且皇國風乃頽禮
廢賀故仁一敏賤喜身止雖毛大和心遠振起志列國乃操正志幾人々止心乎合
世謀乎合世且朝廷乎尊止美姦志幾司人乎除幾服從邊民艸乎恤滿卒止欲
寸留赤心乎美志久照覽志給比謀仁與利乍毛黑心乎挾萬年者乎波立所仁
罰女給比漏落過犯寸事乎婆神直日大直日仁見直志聞直志給比夜乃守利
日乃護利乃守利給比助計給比忠心仁謀利隨意々々事宇麻久成就志給比
皇國乃御稜威波彌廣仁輝幾

皇神乃道波彌遠仁榮江志免給邊止謹美敬比畏美々々毛申寸

文久二年正月廿八日

豊後岡藩

藤原一敏

兩段再拜

みかとをたふとみねちけひとをのそけえみしをしたかへたみくさをあは
れまむとのねかひをとけさせたまへとまうすことよしを はやさふひ
めのおほかみあめのふちこまのみいやはたかに
きこしめせとかしこみくまうす

右百字を冠として四季戀雜百首之歌廿人にて詠出奉納のつもりに御坐候
由

五 山田十郎上書の件

微賤無識之私共 御冢家之御大事を奉議候様之儀申上候段誠以奉忍入候次第に御座候得共 御冢家御急迫之儀を乍奉存傍觀仕候儀も猶更奉忍入候儀に御座候間不顧死罪左に言上仕候抑去十二月伊牟田尙平清河八郎安積五郎等中山大納言殿御内田中河内介と申人中將忠愛朝臣之旨趣を奉し認候書翰を持松村大成宅へ申出候趣には嘉永癸丑以來幕府之諸有司苟安姑息之情より被執計候をもつて畏くも被奉違背 勅諭共冢家之大義候に付賊虜

皇冢を致輕蔑傲慢無禮之極既及侵奪候勢顯然明白之間深く被爲惱

叡慮候所より實に不被爲得已被遊

御親征候御模様にて天下之諸大名早々馳上奉守護

鸞輿候様との御趣意に付此節四方へ令旨被差下等に候尤薩州長州等之諸國應召馳上候筈之由噂仕候間私共甚以驚愕仕不取敢其段言上可仕筈に御

座候所猶退而勘考仕候得は右亡命生之一言を以不容易大義を唐突に申上候儀譜言妄語之疑懼も有之候に付其儘舍措候筈之處右河内介書狀も熟讀仕候得は何様天下國家之御一大事其儘に難默止虚實探索仕候上急度言上可仕と奉存同志申談宮部鼎藏松村深藏兩人上京仕禁闕之御模様奉伺候所方今之御事體殆御幽閉よりも稠鋪眼前不可諱御儀にも可被爲及哉之事件且外夷之猖獗を被爲憤候御内情奉傳承候よりも甚敷又江戸并諸國之動靜彌以不穩模様及見聞候間直様出立日夜陪道兼行仕馳下申候而演述之趣奉拜承候所草莽之私共唯々大息流涕之次第誠以奉忍入候其砌薩州人柴山愛次郎橋口壯助と申者當所通行仕處々に立寄噂仕候趣承候得は此節島津和泉様出府之儀は不容易筋も有之候段承申候間御近藩之儀其儘聞捨には難罷在猶宮部鼎藏罷越於薩州市來驛和泉様供頭副役有馬新七田中謙助御小姓鈴木武五郎村田新八列へ兩度迄及熟談承合候所最初承及候儀に聊相違無之彌以此節は於 京師義舉有之候様子續而修理

大夫様にも大勢御引卒に見カ之身被致候御模様慥に及見聞罷歸申候將又長州之儀は來原良藏堀新五郎及對談承候所薩州同様之趣に相違無之肥前之情實は是以義舉之覺悟有之候趣に御座候其他岡藩之模様も逐一承及申候所屹度證迹有之右之外尾州土州筑前石州因州桑名仙臺阿波等之諸藩も義舉之風説有之候得共是は顯然之證迹無之候間屹度は難申上乍然肥薩長三藩之模様を推而相考候得は大略相違も有之間敷奉存候然に右之條々委曲所々に建言仕置候得共于今何之御模様も相見不申誠に悲憤に堪不申候竊に承候得は私共事浪人體之虚喝を信し御國家之大禁をも相侵し不入建言仕候杯申族も有之御爲筋申出候者を徒黨之様に申成向も有之候私共短才不智とは乍申御國家之大禁をも不顧南北に驅馳し東西に奔走して身命を不惜ゆえんのものは何等之主意にて如是仕候哉仰願くは深遠之御謀慮を以御憐察被成下度偏奉存候方今天下有志之諸大名より御當藩を概見仕居候所は癸丑以降之御處置を根とし彦根藩純粹之御同意と奉存候趣に

而肥後人と申候得は幕府之間諜同様に見成候一人も其國情を明し其内實を語り候者無之薩藩へ參候有志之者共御當所通行仕候者宛も敵國を経過いたし候様之思をなし候様子に御座候私共右等之事情一々見聞仕慨歎憤怒に堪不申御當藩之儀は決而右様之御眞情にては無之段反覆丁寧論辨致候もいまた其御事迹相見不申候に付粲然と疑心相解候様には無之候得共此節丈之事情は相明し候様に成行候折柄此度右等之諸大名應勅意候期に至御當藩よりは御旗一流も御出し無御座候而は彌以初彦根藩御同意之御廟議と概見可仕も難計御座候得は第一天朝へ之御大義被遊御闕且は天下之惡みを被爲受四方敵國と罷成候而は如何可被遊御處置候哉私共疾痛慘但不顧身命苦心候處は此儀に而御座候如何に國富兵強天下無雙之御藩とは乍奉申四達之御囀柄に四面敵を被爲受永久獨立之御廟筭如何被爲在候哉且御名義被遊御闕候而は乍恐御國家之御存亡此時と奉存候實に臣子之情分以死殉國之秋と決心仕候然

舊藩は列藩
或は各藩の
誤ヲ

に今般之儀に付世上論談之趣を略承申候處列國之諸大名内外となく幕府へ被爲對候亦は全く君臣之禮節を相守候譯柄有之諸事 幕府之下知を受可申特に於 御當家様は舊藩とは格別之儀に付殊更 御厚恩を被爲受候御儀に付將軍家を背にして被爲受勅意候様にては御義理合不被爲濟候間此節之儀は御遲緩可然と申唱候族も有之哉に承申候是一通りは尤之様に相聞候得とも唯衆愚を感し候説にて甚大義時體に聞き利口之俗論と奉存候私共竊に愚考仕候に元來 幕府二百年餘之御厚恩を被爲蒙候儀は誰も奉存候事に御座候處先年來 幕府不被奉天朝之御主意事件々有之而已ならず近比に至り候亦は彌以奉逼玉體候勢に立至り候に付實に不被爲得已被爲有 叡斷天皇躬親大義を天下に被遊御徇内にしては奸臣外にしては賊虜可被遊御誅伐と之旨誠以難有

叡慮に被爲在候に付都鄙遠邇之差別なく男女老幼に至迄抛身命鞅掌仕候は當然之儀に有之候右之次第に御座候得は假令一人も勤王之者無之とも菊池氏之如く御當國より義を舉られ上は奉安宸襟下は天下生靈塗炭之苦を救たまはんこそ乍恐至當之儀と奉存候然に此節之儀列藩勤王之事は俚談巷説にても昭々たる事に御座候所不知顔して勅旨を不被下に從是義舉は難仕抔申候者今日之勢に於て何共不得其意次第に御坐候然に勤王は列藩にのみ讓置御當國よりは一人も義徒無之候亦は事成亂平之後何之面目ありて天下之人に面を合可申哉誠以慨歎に堪不申候つらく皇國之大體を相考申候得は前條之通愚昧之俗人君臣之名分をも辨別不仕族も間々有之候得とも元和以來今日に至迄曾て 幕府をさして君上と稱候義は全く無之乃 幕府も諸藩も官位は同く

天朝より叙任せられ候をもつて見候も君臣に非る義は明白に相分り
幕府は武家之棟梁と唱候通にたへは
天朝は父母 幕府列藩は兄弟之續之如き者に御座候も是迄は大兄より父
母之意を奉行仕居候所此節右大兄之臣僕白刃を以て父母に逼居候勢に不
異然に二男三男共兄之臣僕か所爲は即兄之意に可有之とて父母を如何に
致候ても無爲方と致傍觀居候義は有之間鋪身命をもつて其間を押隔白刃
を差向居候臣僕を斬斃し先父母之危急を救左候も右之所爲は兄之意に無
之候は、幾回も父母には過を謝し兄には規諫をいたし候も父子之恩を傷
はす兄弟之誼を失ひ不申社今日天下至當之要務と奉存候右之通混亂に不
相成様是迄力を盡し妻子臣僕は或は打虐け甚きに至ては殺身に至ものも
不少是亦兄之意に可有之哉父母伯叔之悲嘆をも不顧徒に打過候も如何可
有之哉雖路人保護可仕候所一家内にして路人にも劣果候事萬々人倫之上
に於て可有之理とは不被存候其上此節

天朝之御趣意決り 幕府を御追討之儀に無御座内にしては姦邪之臣僕を
誅し外にしては狡黠之夷賊を征し玉ひ萬民之患難を被遊御救候御義に候
段は確實に承取申候事に御座候右之主意に被爲基 御國是一定之基本を
御建立被爲成候様若不然して唯々 幕府へ御報恩とのみ申候もは萬一
朝敵之名を被爲受候様に成行候もは天下正義之惡みを被遊御受何方に
御報恩被爲出来候哉誠に不堪慘但次第に奉存候右之通に候得は御報恩に
無益のみならず 御國家御傾覆を被爲招候譯に實に被爲對
御先靈様於御孝道も如何之御儀と重疊奉懸念候私共叩頭流涕奉懇願候は
何卒一體不易之

御國是を被遊御定筭早々御勇決被爲有度幾重にも奉存候若此節御遅緩之
議にも被遊 御治定候は、報國盡忠之輩不願 御國典一己々々之赤心を
相盡し申候様に成行水府之故轍を踏に至候もは實に

御國家御殄瘁之基共奉存候間何卒私共建言之筋深御憐察被成下片時も速

に御英斷被遊被下候様重疊以死奉至願候微賤之私共ク様に 御國家之御
大事を喋々奉議候儀實に僭踰之罪難逃奉存候得共臣子之情分所不得已よ
り不憚尊嚴建白仕候所如是御座候誠惶□死罪々々頓首謹言

文久二戌年三月

右上書山田十郎草稿之由佐渡殿へは魚住源次兵衛持參監物殿へは佐々淳
次郎持參に相成候尤兩家之書付文言は少々替も有之候由

六 小坂翁上書艸案

禁闕に矢を放候者は有之間敷候得共於 京師列藩互に弓矢に相成候は、
禁闕之邊究る干戈之街と相成 玉體は矢石中に可被遊御座且廻録回録カ之恐も
不少旁危急之御時節安然として寢食を甘居候時に候哉臣子之情分之をも
可忍は孰をか忍ふへからさる也天理人情共是非御守護可有之筋と奉存候

願くは未發之内早々御人數被差登候様有御座度奉存候若事に相成一日
玉體を失石中に被爲置候得は臣子一日之責を被爲受候も御申譯相立申
間敷奉存候間一刻にても急速に御差登度事

君臣之名分計日々夜千萬御唱有之候とも其實無之は疑惑之族も不少人
心安兼動搖に可至勢にも見申候間急に尊 王之實御立御國中之疑惑被成
御解候事

天朝をば御手厚上にも御手厚御心力を不被爲盡候はては此節 御諫諍之
本立兼可申 御身を以被爲先立御忠節之實御失ひ御口上之上計りにては
感動之筋無之所謂枉尺直尋之類に大義之 思召立思召通には被行間敷
御手元如何れとか御省被遊度事 付言

御人數被差出候上之儀は申迄も無之幕府未だ御解官も無之内に付諸司代
へ御伺 禁門何方にても差圖次第 御門固被遊候儀可爲當然事

四月九日 (文久二年)

小坂 秋 月

山にのみ住にし人にしらせしな蒼海原の春のけしきを
今もさもかくあるものと世のなかの人はうつゝかゆめにそありける

七 熊本藩廳より達等の件

沼田勘解由殿御留守居大頭
無程大目附御使者

被仰付候節御渡之書附

副使

右 田 才 助御穿鑿頭
後御奉行

魚住源次兵衛御物頭

橋本源右衛門御郡代

於

天朝は往古より君臣之名分粲然たる儀は申迄も無之引續公義は武家之棟

梁職を被任置候に付萬事被重候と申内此方様へは別御鴻恩之譯も有之
候處近年關東御處置筋付は殊之外
宸襟を被惱候趣に而間には不穩唱も相聞四方之外夷

皇國を相窺候折柄萬一内亂を醸候體之儀有之候は大切至極に付此節
京都へ別段之御使者被差登現實之御模様具に御窺之上 叡慮之旨御尤之
御儀は悉被奉畏關東へ御涯分丈け被 仰上猶於關東無餘儀事情も被爲在
候はゞ是又 京都へも被仰上干戈に不及

宸襟を奉安東西至當之御政道被得人心も致安堵候様上下一致之御力を可
被盡候事 三月 (文久二年)

右御使者追御免に相成候

一四月朔日 太守様御著座翌日御意書取

京都は勿論江戸へ奉對弓矢を向候存念無之國家に替候も東西致忠節
天下之事至當歸し候様取扱度從來之本意候事

別紙

御留守中人氣動搖いたし候儀は畢竟上之輕きより之儀と被 思召上旨
御沙汰之事

右等に付御家老衆引入知せ狀寫

拙者儀京都表之儀に付る種々唱之儀有之人氣動搖之萌をよひ候處取鎮
届兼相州交替之御人數引揚差立等不被爲叶 思召 御沙汰之趣重疊奉
恐入候依之自身伺被受置候との趣に御座候

右之趣に御一門御家老御奉行衆四月二日より差扣に相成日數七日
終る御免之由

八 米田三淵兩家へ投文之寫

今度御國是立兼候事は則 君上之御不明と申者に一國之事は天下に關

係此節之事付るは奸賊之臣四五輩御座候一日も早く誅伐仕筈に御座候御
氣遣不被爲仕様奉願候承候得は佐渡殿奸臣之様子模様により打取可申候

四月十六日 (文久二年)

有志之士

同士四拾人餘り

奸臣と申候は片山永田井上村井に御座候亡命之節一番に血祭致し候
筈に御座候一兩日中御覽可被下候以上

九 風説書之件

一此節京都表之儀付るは 太守様御苦惱被 思召上屹度 思召之旨有之
江戸へ可被遊 御諫啓候 京都に變有之 玉體矢石之中に被遊御座候
節は申迄も無之急速御人數可被指出旨於御花畑住江甚兵衛被 召出

良之助様より御直に被 仰渡候御手當之儀は兼る御達にも相成居候得共此節急速用意調候様御備頭へ御内沙汰可有之旨被 仰渡候同志中何れも此旨奉敬承候様若存念之儀も有之候は、御附役迄可伺出旨被 仰渡之

四月十八日 (文久二年)

右之御書付は住江甚兵衛へ 仰渡候

御意之趣を奉傳承宮部鼎藏轟木武兵衛等書取して 御趣意如何と御附役大矢野次郎八へ相伺候處御趣意に相違無之候得共猶奉入 御内覽候上可及返答との旨に候處右之朱字だけ依 御意添削有之候事
一 彼之儀に付片山喜三郎早打に於三月四日此許被差立勢州龜山に於 太守様へ御行逢直様京師へ被差越四月中旬歸著懸途中に於或人へ談話書取左之通

京地は格別相替儀も無御座候得共道中筋諸藩之早飛脚誠に櫛之齒を

引がごとく有之如何之事起り候も難計將又長州之儀は宮部鼎見聞之趣承り候よりも甚敷有之候との事

一 五月上旬青地源右衛門早打に於到著之上 御花畑鹿之御間御しまり付にて 御目通被仰付候よし

但青地源右衛門持下り之御用筋も如何之儀に有之候哉一向相分り不申しかし外之儀に於も有之間敷何様攘夷等之儀に付之事なるへし
一 蠻夷渡來已後 皇國人心不和を生候に付土州侯へ三條殿より肥後へは先月廿一日一條殿より筑前侯へは二條殿より右いつれも同文に於御添書有之早々出府周旋有之度周旋方之儀は出府懸立寄候は、委細被 仰含との御事に候由

風説書

一 正月元朝春日若宮社所祭天忍の神鏡事なふしてをのつから四ツに致破碎候由右は上代にも有例事に於每兵革之兆に御座候由夫さへあるに又

同朝多武峯神社所祭藤原鎌足公之御鏡餅微塵に粉碎いたし候由又同十一日には祇園社之大楠風なふして大枝折候由彼といひ是と云ひ不容易神變に付其段早速奏聞仕候由に御座候處

天朝には深恐畏み給ひ嚴き御慎に御座候之由に御座候誠に々々奉恐入候御事に御座候右等之事有之故にや當年も又々臨時に勅使被差立

太神宮へ被爲籠御祈誓之由

叡慮之被爲在候處乍恐一點之間然なく彌以神祇之大御心に被爲叶遂には大御威稜を萬國に輝かし給ひ朝日の豊榮登かことく大御榮ますへき事無疑草芥莽カ之微軀も未頼敷竊に相樂居申事御座候右勅使には

太守様御下向之節勢州龜山宿に御行逢に相成候由に御座候

一和宮様御縁組に被奉預候諸卿方千種様岩倉様初として皆々差扣被仰付候由左も可有之事に御座候

一二月末頃京師通行之者咄に安藤候一件之後は洛中洛外共殊之外嚴密なる事に相成候而旅客杯一切足を留候儀難相成其上其頃は彦根候上京前に別而嚴重に有之洛中洛外共彦根小濱之藩士のみ充滿いたし居候而一々相改候由誠々かしこき九重之下を傍若無人に振舞候段不敬無禮之至言語道斷之次第に御座候所司代は安藤騒動之後は殊之外恐慄之由に一切外出仕不申御用節には九條殿下迄文通に取遣有之嚴敷用用心之由に御座候彦根之上京は暫差扣候様との勅諭に當時國元に留り居申たる由

京師に之風評に御座候由此元には當地發途之砌より一旦は國本へ立寄候而上京之由風評に御座候いづれ實説に御座候哉難定儀に御座候

一日光宮様去九日當表御發輿に御上京に可相成定而天朝と幕府之御間を御合體被遊候様御執成し御爲には有之間敷哉私

に推察仕候居し事に御座候

先達あは右 宮様水戸へ被爲入是も御中直りを御執持に相成候はとを風聞も御座候へは右 御上京も尋常には有之間敷と被申候事御座候一安藤侯手疵も全平愈致候由には既先月廿五六日頃登城有之是迄を通御役被 仰付候由に御座候へ共右一旦を登城迄には御役御斷願に相成申候由に御座候

一先月廿八日には墨夷登城仕申候如何成事共申談候哉一向相分不申候一御殿山を之方も近來は又々取懸當夏内には大方成就仕可申と奉存候事に御座候

右風說書大野園安江府より四月十四日發五月六日到着 文久二壬戌年五月寫之

壬戌四月

一〇 宸筆にて公卿方へ御下けに相成候趣

夫聖人に非るよりは内安ければ必外患有り方今天下二百有餘年至平に慣れ内遊惰に流れ武備を忘れ甲冑朽廢し干戈腐□す卒然として夷狄を患起て不能應之終に癸丑甲寅の年より有司益駕御の術を失事模稜多し是以戒夷不知所恐懼徵求無厭條約を定め關市を通せん事を請ふ幕府因循不能拒其請以旗下小吏奏聽 朕知其誣岡下斥之翌巳年二月幕府以老吏堀田及二三小吏登京事情を陳し切請不止 朕熟案古今夷狄を憂雖不少近年を如甚きは未有之也若一旦親狎を之羶流穢溺 神州陵沈し 朕か世に至て初て金甌をを缺は何以て 先皇在天を之靈に謝せんやと深謀遠慮し群臣諸方に咨詢するに皆其不可なる事を白す又列藩内密上言の者有て更に幕府に命して大小名に令し時宜を陳せしむ然るに幕府命を脱し肯て是を天下に傳示せず 朕深憂慮し未處置する事不有於是羣臣八十八人奮然として奏狀を以

朕か意を賛す又或曰 朕若幕府の請に不従は必承久元弘の事を爲んと然とも 朕叨に一身を以て祖宗の天下に易んやと卒に重て命するに前令を以て次て幕吏を返らしむ又使を發して幣を三社奉し戎夷 國體を汚す事なく人民其生を安せん事を祈請す庶くは弘安の先蹤を繼んと豈圖むや旬日之間幕吏 朕か命を不用途に條約を定め通商を許し片紙を以て奏曰時勢切迫す不得止也と

朕殊に其侮慢無禮を怒といへとも未遽に譴責せず三家家門或大老を召し其子細を尋糺せんと欲す然に尾水越其餘三の名藩臣籠居し又曾て命を奉せず次て前將軍薨せり又忠告する者あり曰嗣子幼若將軍に托する事なく暫く其爲す所を見て而後托之よと然共直に其職に任し其を以其職を盡さしめんとす然に將軍幼若有司柔情 朕か意に稱ふ事を不知曾攘夷の念なく却て之を親昵し剩正議の士を排斥

す 朕其三家三卿等を召すとも不來剩正議の名藩臣を退隱或は禁錮せしめ其積鬱の餘激して變を生し外夷其虚に乗せん事を憂慮し辭命を幕府水府に下し天下の大小名同心合力幕府を輔佐し内奸吏を除き諸藩勤王の心を慰め外黠夷を拂ひ各國窺竄の念を絶せしめんとす然るに皆 朕か意を體し其命を海内に傳示し天下一心戮力徳川を輔佐し外夷征殄の議を不與却て公武不和の難を醸し 朕深く之を憂ふ其間事々紛々盡言べき事難し然共其一二を云んに人々以爲幕府如是衰弱不振戎狄如是猖獗不懲則外患何時止まん 神州の正氣何時回復せん人民何時座を安せん是豪傑英雄の將に非むは治する事不能すと三家中一橋は其英明なるを以之をして其職に當らしめん寧よく大事を成就せんと是以草莽有志之士其中に周旋^{旋カ}奔馳するもの有又其門奸猾其意を快せんとする者有て事多く 朕か意の如ならずして間部下總守登京幕命を以天下之事を論する者一切に縛收して是を江戸に下し次て四大臣落飾幽居し正議の士於以盡く下總守幕議を白し

て曰條約押印の事は先役備中守所爲にして當役の知所に非す即今條約を返し通市を止むる時は外國に不信を傳ひ彼の怒を激し異變不測を生せん環海武備未だ充實せず且大奸内に在り若外患起らば内憂みに乗せん然らば忽ち土崩瓦解如何とも爲へからざるに至希くは幕府の申所に任せて姑く天下の時勢を御覽せん事を必年を輕すして戎狄を掃絶し神州の正氣を回復せんと是以 朕不得止其請に任せて天下の事勢を見る其後庚申年三月三日水府浪士井伊——を刺す事有所爲は亂暴に似れとも其所懷中の狀書を見て其意を察するに深く外夷の跋扈を憤怒し幕府の失職を死を以て諫に有是 朕か嘗より所憂又其後年墨使を刺し又東禪寺の件々皆其意斯に基けり其餘外夷の陸梁なる對州の事二ヶ國相増事兵庫より陸行江府に至事海岸測量殿山を借與の事等 朕一々幕府其然さる事を責れ共幕吏奏曰是皆一時の權宜にして浪華開商延期の術策なりと又奏請曰外夷を拂殄するに天下一心戮力に非すんは爲し難し故 和宮を以將軍に尙して

以て 公武一和を天下に表し而後戎夷勦絶に可及也不然は 公武の間を隔絶せんとするの奸賊ありて外夷拒絶に及ひ難と

朕念ふに 先帝遺腹の妹を以百有餘里の外に嫁して古來未曾有の武臣に尙せし事 朕か意實に忍さる處なり然に幕吏切に内外の事情を陳述し朕か憐を請て不止 朕も意に不忍といへとも 祖宗の天下には易へ難しと意を決して其請を許も十年を不出必然外夷拂除の事を命し且海内大小名 朕か意を傳示し武備充實せしめんとす幕吏連署奏狀云皆 朕か命を聽んと故去冬 和宮入城の事に及へり然に今春に至り幕吏安藤對馬守浪士の爲に刺さる是等井伊を刺せし者と同意の者にして皆此輩は死を視る事歸るか如く實に勇豪の士也嗚呼此輩をして少く其憤鬱する處を伸へしめて論すに丁寧誠實の言を以てして暫く其勇氣を儲しめ他日非常の變に用ひ其を先魁たらしめば堅を銜き銳を挫に於て何の難事かあらんや誠に惜むへき士也幕府意を斯に不著日夜猶其黨を探なるへし是縦に怒を天下

に構へて事にをいて益なし其本に反らすして徒に威力を以て制せんとす
れは是を捕れは又斯に生し天下の變止時なく終に大變を激生するに至ら
ん是 朕か深く憂慮する所なり聞翌十六日將軍拜廟の事あり有司前日の
變を以て拜廟の事を延引せんと云へり然に拜廟の事を變せず是を行へり
と 朕其寛量を愛し因て思ふ庚申三月以來九門外に守兵を置き又關白邸
亭にも兵士を置き或は參 朝に密に武士を具して非常に備ふと是等 朕
深く慙憂するところ也因て又思ふに往年 三社に奉幣せし以來神州の汚
穢を掃除せん事を朝夕禱請して又法樂亦今猶之を行ふに庶幾は以て前の
志願を全して之を終んと去年元を改め天下と與に更始す公主既に尙し公
武實に一和す此時に及て既往は咎ざるの教に由りて天下に大赦し三大臣
の幽閉を赦し列藩臣の禁錮を赦し有志の士の連座せる者を赦さん事を速
告幕府以て此舉を行しめ是

朕の深く所欲也而後天下心を合せ力を一にし十年内を限り武充實せしめ
斷然として夷虜に諭すに利害を以てし一切に是を謝絶す若不聞は速に膺
懲の師を舉海内に全力を以て入ては守り出ては制せは豈 神州の元氣を
恢復せん難き事有んや若不然して徒に因循姑息舊套に従て不服海内疲
弊の極卒には戎夷の術中に陥り座なから膝を犬羊に屈し殷鑒不遠印度の
覆轍を踏^{踏カ}は 朕實に何を以か 先皇在天の 神靈に謝せんや若幕府十年
内を限り 朕か命に従に膺懲の師を作さすんは 朕實に斷然として
神武天皇 神功后宮之遺蹤に則り公卿百官と夫下の牧伯を帥ひて親征せ
ん卿等其斯を體して以 朕に報せん事を計れ 右仙臺藩玉虫左大夫より
手に入ると原本にあり (文久二年)

一一 長井雅樂於京師申立候書附

近年黠夷猖獗仕候に付 御國威日を追て逡巡當今に至り候^候は衰微漸^にく

甚しく皇國未曾有之御大難は縷述に及はず候斯る時勢に立至り候儀由て來る所有之數百年の太平武道地に墜ち武備廢弛仕候より一旦點夷の虚喝に驚き輕易に條約を結ひ終に今日に至候事口惜き次第に候得共是以太平之餘弊今更論辨仕候共其益無之此餘は武備を廢れたるに興し國難を未だ覆らざるに救ひ候儀當今の急務に候得は上天朝幕府を始め奉り下士庶人に至り候迄精神を凝し興救之策を求め候は同一般に候得共人心は面のことく策略一途に出不申或は鎖國の論を旨とし或は航海の議を唱へ自然人心の不和を生し時日を空手に費し候中衰微日を逐て加はり只今之形勢に候得は終に點夷の術中に陥り可申も計りかたく候箇様人心の不和を生し候根源を尋候へは關東に於て御據なき御次第有之候由にて叡慮御決定も無之内和親交易の御條約有之候由に付逆鱗不一方關東之御所置御取糺し條約御破壞被遊度との御事に候へとも關東に於ては一旦外國へ對し御條約相濟候儀を無筋に御破壞相成候は忽戰爭之門を開き即今

莫大之御國難に立至り且數百年太平鼓服之武士を以干城に御當被成候儀無御心許思召候哉速に御奉命も無之因循無斷今日に至り判然たる御所置無之斯る切迫の時節右様無斷に時日を費し候は彌増傾覆に迫り候事は凡庸淺智の者に亦も頓に識得仕候へは況乎羣才富智辨の關東にをいて御洞見無之筋は有之間敷假令御疎漏有之候共言路塞り候と申にても無之定亦忠諫仕候者も可有之然るに前段之通御決意之御所置無之は鎖國之御決定有之候得共即今莫大之御國難を生し又航海の御決定有之候へは彌増逆鱗甚敷御國內如何様之異變出來も難計御國內異變出來仕候は所謂鵲蚌之憂眼前之事と御遠慮有之態と無斷に時宜を御待被成候共に可有之訝かしく奉存候元來點夷と同等之和親を結ひ候儀開國以來未曾有之事に亦候へは假令無御據之御次第有之候共何とか御申宥め被爲置第一叡慮御伺且後來之御所置をも豫め御定め置其餘に亦兔も角も御沙汰可有之御事に候處左も無之輕易に御國體を御動し被成候儀素より如何之御

事故 逆鱗被遊候は御尤千萬に假令御嚴糺被 仰出候共聊御申譯無之程之御事柄に候得共深遠之 叡慮既往御咎なく今日に至り候も亦 御國內異儀を生し候るは御事と思召候而已に可有之實に寛大不測之 叡慮蒼生之甚幸不過之難有御事奉存候得共萬死をも不願直言仕り乍恐九重深宮の 玉座時論悉く 叡聞に達せず且一旦慷慨の説 輦轂之下に輻輳仕候を以天下の公論萬全の策と 聞召上られ候哉頻に破約攘夷を以關東へ被仰出候よし然共當今に至り破約攘夷を申儀時勢事理を深察仕候者は決して承伏仕らざる事に唯當時慷慨家と唱候血氣の若輩のみ愉快に可奉存其子細は只今破約と相成候へは黠夷共決して拜承仕間敷戰爭に相成可申候戰爭を忌候儀更に無之候へとも戰は國之大事存亡の係る處に候深謀遠慮無之輕易に發すへき事に無之候夫戰んと欲る者は先其利害曲直を明に察し直利我に有之而後戰候事所謂勝算にて古今名將之重する所に曲害皆我に在れば憤懣懣カに堪す或は一時之血氣に誘れ無策の戰を起し敗亡をと

り候者古來歴々數へ盡し難く候處然カるに當今關東に於て御條約相濟候儀京都には一圓御不納得の御事に候へは關東には容易に 御國體を御動しとの趣を以て假御取糺有之候共 御國內而已之御事に而外夷へ對し御口實には相成間敷其故は 皇國三百年來御國內之御政道は關東へ御委任に相見へ外國へ對し候る之御駈引も皆悉關東より被 仰出候へは外夷とも關東を以 皇國之政府と心得候は最之事に於て其政府に而條約調印相濟候へは同盟之國と心得候事是又無餘儀事に候然に當夏に至り天朝御不納得之筋を以て卒然約を破り盟に背き候は、彼等之各國三百年來之例を申立て不信之名を以て 皇國へ與ん事必然に候且關東は武臣棟梁に候處外夷へ面目を失ひ浩然之氣を俄し候るは事有時之御用に相立間敷是我に曲を取彼に直を與ふるの拙策にして智者の取ざる所に候且彼は航海に熟し利器を以數萬里の海路を不日に駛行し數十年航海を業と仕候國柄に候得は船數に富み殊に近年 皇國之海路に熟し候事故戰爭と相成

候は、要津に出没し府城を剽掠仕候は必然に候左候時は海國申に不及海路不通之國迄も隣國騒動に及候は、自國警衛之外他事無之候半假于九州を以て譬へ候へは纔四五艘之軍艦を以て朝には東し夕には西し或は濱海に大炮を發し或海邊之民屋を放火し淺く働て軽く引候は、陸路の將士奔命に勞れ我々追討へき軍艦に乏く切齒扼腕のみにて手を束ね彼に致さるの外定策無之恐らくは九州數百萬の士民僅に四五艘の夷艦に羈縻せられ心は彌武に候とも自國の騒動差置かたく只一人も赤馬關を涉り東しすること決して相成間敷奉鏡を照して見るよりも猶明かに候六十餘州の中に於て海路不通之國とては纔に四の一に足り不申然るに四の三餘夷艦之害を受候は、一にも足らぬ國々も唇亡齒寒の戒を守り隣國を救ひ候位は兎も角も兵を遠國へ遣し候儀は決して相成間敷 京師は素より日本之頭目に候へは四肢の國々舉る保護仕候は理の當然に候へ共四肢病を受候へは頭目の用をなすこと能はず是亦自然の勢に候是黠夷の胸筭にて彼か恒言

に日本は二三千之兵を以て陥るへしと妄説の由て起る所に候斯る時勢に相成候は、京師の擁護實に心許なく萬一 京師を黠夷の蹄に穢され候儀共有之候は六十餘州戰すして彼か爲に屈辱せられん事思ふも忌々敷事に候尙又數百年太平鼓腹の武士を以て急卒無策之爭端を開き候は其利害三歳の童も辨すべく候然は曲害は我に有て直利は彼に在り是時勢事理を深察仕候者は輕々敷戰爭を好み不申所に候扱又鎖國と申儀も三百年來之御掟にて島原一亂後別る嚴重被 仰付候御事にて以前は夷人共内地へ滞留差免され且 天朝御隆盛の時は 京師鴻臚館を建置れ候事も有之由に候へは 皇國之御舊法と申に亦も無之

伊勢神宮の御誓宣に天日の照臨する處は
皇代を布き及し賜ふへしとの御事の由に候へは夜國氷海は兎も角も天日の照臨なし賜へる所は悉く知し召すへき御事に而鎖國など申儀は決して神慮に不相叶人の子孫たる者上下となく其祖先の志を繼ぎ候事を述るを

以て孝と仕候已に神后三韓を征し給ひ候も全く神祖の思召を繼せ給へる御事にて莫大の御大孝と今以稱し奉候中古は未海外之事明細ならず候へは三韓の外若干之國ある事を聞し召給はす若し聞し召給は、御征伐三韓にて御止りは有之間敷想像奉り候然るに當今五大州若干の國有事を聞召のみならず彼より憚らす皇國へ來り剩へ皇威を蔑にし奉るを鎖國にて御禦き被遊ん事神慮之御誓宣に御戻りに當り神慮之程も難計誠に恐入奉候假令鎖國之儀を主張仕候とも守る者は攻る之勢ひ有之候而程能に守り候譯に候得は鎖國仕候共攻るの勢は決して虧きかたく候徒に海岸嶮峻を頼み鎖國仕候而は鎖國は萬々無覺東候然は當時に於て攻取の勢ひを張り候儀第一之急務と奉存候へは仰き願くは

神祖の思召を繼せ給ひ鎖國の叡慮替られ皇威海外に振ひ五大州の貢悉皇國に捧來らすは赦さすとの御國一旦立せ給は、禍を轉して福となし忽然夷虚喝を抑へ皇威海外に振ひ候期も又遠らすと奉存候然共

太平餘古今神后の攻取之御跡を踏候はん事是又下策に出可申候へは急速に航海御開き渠か巢穴を探り黠夷の恐るゝに足さる事を士民にしらしめ漸次に皇國之御武威を以五大州を横行仕候は、彼自ら皇國之恐へきをしり求すして貢を皇國に捧け來らん事を期して可待候又破約攘夷と申儀只今に至り關東へ被仰出候は、乍恐態と御威光を御損し被遊候に當り最不可然かと奉存候其子細は關東に在り只今約を破り候而は御國之御爲宜からず御決定相成居候様相見候へは幾度倫命有之候共表は御奉命有之候而も實之御奉行有之間敷御奉行無之儀を度々被仰出候へは其度毎に御威光相減し歎かはしく奉存候然共時勢を以て私考仕候へは輕卒御奉行無之も傍ら御不策とも申難く候半哉然は公武共に御國の御爲思召し候儀は御一般に付右御違却相成候は、定而京都には關東を柔弱恐怖と思召し有之關東には京都を御暴論と厭はせられ候にて有之遂に隱微之中猜疑不和を生し千緒萬端因循苟且の根源と相成一振之目途無之

口惜次第に奉存候間仰願くは偏に 皇國之御爲と被 思召 京都關東とも是迄の御凝滯丸に御氷解被遊改る急速航海御開き武威海外に振ひ征夷之御職相立候様にと 嚴勅關東へ被 仰出候は、於關東決て御猶豫は有之間敷即時 勅命之趣を以列候へ 台命を下され御奉行之御手段可有之左候時は國是遠略 天朝に出て幕府奉して之を行ひ君臣位次正しく忽ち海内一和可仕候海内一和仕候る軍艦に富み士氣振起仕候は、一團之皇國を以て五大州を壓倒仕候事掌を指より易く可有之候斯る時勢に一變仕候は、即ち神祖の御誓宣に叶ひ萬世不朽莫太之御大業と奉存候然るを唯今の如く隱微の中 公武御不知判然たる御所置無之候るは御國內之衰微日を遂る甚敷蒼生生活之途を失ひ遂黠夷の術中陥り嚙臍悲嘆の期に至り候半も十年之外に出申間敷と口惜奉存候かゝる時勢候へは主人忝皇朝連綿之門地に生れ幸に兩國之主に任し 天恩幕寵一身に溢れ候へは出位には候へ共傍看を快と仕らす日夜寢食を忘 御國威御更張之機會を

熟考仕候處癸丑甲寅實際に候は、鎖國も上策に出可申候得共當今に至り候るは却る下策に落候半歟時を察せず勢をも制し不申候るは挽回の期無之已に今年辛酉革命之年に當り天數も亦相應し候得は禍を轉し福となし申も偏に

天朝の御決議に可有之矢石白刃を侵し風雨霜雪に浴梳仕候は大小となく武臣の甘心仕候處に候へは尋常の儀格別之御奉公と不奉存不肖には候得共臨事而懼れ好謀而成時勢挽回仕 皇威海外に輝き四夷順服の日に至り始る御奉公と可奉存候前件之旨趣關東へ申立度心得候處 朝議之趣一圓心得不申萬一も 朝議に悖り候るは甚本意を失ひ候間内密小臣上 京申付御内々相伺關東へ罷下候様申付候然處右旨趣書取を以申上候様にとの御沙汰を蒙り誠に以奉恐入候此段一應主人へ爲申聞候は、兼而謹厚之質ケ様疎暴之申上は爲仕申間敷候得共其暇を得す小臣素より邊鄙草野之産殊に文字拙候へは俚語鄙言を相混尊覽瀆し威嚴を冒すのみならず且禁忌

を不憚時勢を不諱申上候儀是非其罪萬死に當り可申候得共死を恐れ詞を飾り候は本意に無之素より主人にをいて如斯不敬之意は更に無之唯小臣狂逆之所致也恐々懼々伏地待罪 (文久二年)

採襍錄卷九

一 長州侯上疏

奥にあり 委細之儀演說書を以可申上候以上

近年外國より種々難題之儀申立有之様相窺且内地不慮之變も出來仕内外共御煩慮之御時節と奉恐察候 廟堂之御籌策其外向より可窺計様も無之御歴々之御評議御遣策可有之とは不奉考彼是以事々間敷申立候は越俎之御譴責奉恐入候得共當時勢

皇國之御榮辱に相拘り候儀も可有之哉奉考候は區々之鄙衷日夜難忘不得止事無根之世論へ心を留述辭之議論兼る相含居候付不顧憚御内々申上候尤世上之議論を取り御政體にも相拘り候儀申立候は猶更恐懼之至に御座候得共右鄙誠之處被 開召分不惡御取計被成下候様奉願候右申上度

旨趣は先年來度々申立候通り待夷之良策は 公武御一和 叡慮御遵奉に
基き可申と數年相合居候鄙見に御座候處過る午年以來 公武之御間御談
論御齟齬之儀有之様於世上奉伺計種々雜說紛興仕段々御手煩を指起し餘
程御配慮も被成候哉と奉伺候竊に事之所由を愚案仕見申候處先年外國へ
和親御指許し條約御取替し相成候儀は元より無御據御場合有之候之儀
に候得共癸丑甲寅以來奮激之人氣一旦屈挫仕儉安之人情一日之無事を貪
り終に一統退縮之世風に罷成 御國體更張之期無之様相成可申と氣節を
負ひ慨志を抱き候者外夷之威力に壓られ安を偷み戰を忌む俗情より斯様
相成儀と存詰猥に 公義之御處置を如何敷批判仕 叡慮之旨は鎖國之御
舊規を御確守被遊候様相唱破約戰爭之說を主張仕壯年血氣之者之憤言激
行を醸成し且又彼我之形勢を考彼之功利技術を味ひ候者は開國之說を主
張仕猥に彼を誇輝我固有之正氣を折き商賈貪墨之風に染漬し議論紛々兩
端に分れ一旦に攻撃之形を成し人心洶々土崩瓦解之勢共可申哉天下之勢

合へは強く離れは弱し此分離解散之人心を以一旦有事時勢黠夷強虜に御
當り被成候儀は何とも氣遣敷儀と奉存候然るに鎖國開國と申居候は待夷
御大體關係重り候得共其根元より見候へは是等は枝葉之說とも可申 公
武之議論草野の可伺知事には無之候得共斯枝葉之是非を以御遺却之儀出
來仕候筋も有之間敷と奉考候其故は能可守して是を攻能攻むへくして守
之者兵家之常典鎖國する事能はされは開へからす不能開は鎖すへからす
御國體不相立彼に凌辱輕侮を受候之は鎖も眞の鎖にあらず開も眞之開に
あらず然れば開鎖に實に 御國體之上に可有之 御國體相立候へは開
鎖和戰は時之勢に隨ひ守株膠柱之儀は有之間敷然るに又 御國體被相立
候基本と申候得は大倫大義を明にし天下之議論純一人心和協之御處置に
可有之哉右物議紛々相起り本意を熟考仕候ても 公武之御間純然御合體
に 御國體相立外有之間敷種々雜說御手煩も指起り之は末弊にて可有
御座候に付其源を塞き其流を御治め被成候は、御鎮定強て御手間取被成

候儀は有之間敷候往昔草昧之世に違ひ當御治世以來厚き御世話に文教大に開計倫理世に明にて君臣之道を可崇事は三尺之童子も口に藉候様罷成候付是迄迎も聊無疎略御事には候得共天下之大經を被爲立候儀は萬々御厚重被爲在度御事に付此時勢に當りて今一際天朝を御崇奉之御取扱振り世上に相彰れ候は天下之人心感服仕り右物議御鎮靜容易に相整御國體之基本も相立可申哉右基本相立候得は是まて開港和親を被指許候は乍恐未枝葉之御處置にも可有之哉に付速に開國之御大規模被相立御國體儼然と相立候様御國論被爲定度御事と奉存候左候へは御手を可被下候處は武備益御張興にて航海之術廣く御開人之心膽を練り知識を發明する道へ向ひ諸藩之情實熟知之上は彼か畏るゝにたらざる處をも知り我恃むへき良策も相立可申此非常之時に當り中興之御大業を被爲立度御事には候得とも人心之折合方深く御案被爲在候由去る己年御沙汰之趣も有之制度御改航海之術御開等之儀は疾く御評決被爲在

今更當否利害等不能申上儀に可有之其後追々御沙汰之趣を奉伺候も乍憚御趣意筋奉深察候然る處今以御國內一統耳目一新仕候様御沙汰振も無之候は何か御深謀被爲在候事に可有御座其段は奉伺筋に無之候得とも宇内之形勢は年席追々相開候に付今日の如く御國體御變革之機會に臨み候も自然之勢に可有之若し舊習に泥み漸々時勢に押移され無據御變革に相成候は御手後れに相成候而已ならず却る人心之折合方にも相拘り可申哉と深く奉恐入候儀に付右御國論速に御決定に相成候様相願候儀に御座候右之通御合體之御取扱顯然と相成天下之人心奉感服御國體儼然之御國論被爲在候は定る御慮も可被爲在素より開鎖之體へ御泥み被爲在候儀は有之間敷候に付何卒御慮を被爲起右國體之旨勅諭を以被仰出右を御遵奉被遊台命を以列藩へ御沙汰に相成候は條理斷然人心彌感服仕退縮之氣一旦進張に相改り儉安之陋習も奮發仕神州億兆之人心一和一團正氣と相成前後

種々之物議も氷解仕毫も内顧患無之御國威凜然五大洲へ相振候御大業も成然可仕哉迂僻之私見に御座候右は始より御廟議之上にをいて大海之消滴とも相成度心懸候にも無之候得共數代無限御寵命を奉戴御恩澤身に溢れ居候に付兼々報効之心得に罷在不圖時勢に感發仕不願僭妄申立候は只々食芹之味進獻仕度區々之鄙誠不惡御亮察可被成下不都合之儀も御座候は、御聞捨被成下度重疊奉願候已上

二月（文久二年）

松平大膳大夫

二 長州侯再建白

外夷鎮撫

御國威更張之御處置に付は作公武御深意御合一可被爲成速に御國是

を被成御定海内和協御武威海外に輝候様に被 仰付之外有御座間敷と奉存付越俎之罪を不顧鄙意申立候處獻芹之微志不被捨置深重之御内慮被仰聞御誠意を奉感戴微志彌増不得止於 京都堂上御方々迄前段之旨趣内々申上候處恐多も被爲達

天聽今般私儀上京仕候は、御沙汰之旨も可被爲在由 御密旨被 仰下冥加至極至極難有仕合に奉存候依之又熟考仕候處不得止次第とは乍申私式外様之身分として直に奉汚 天聽候段甚以奉恐入候ケ様之儀自然列藩并草莽志士承及天下之公論と存候事件は公義を差越直に 朝廷へ申上候不苦様心得違自己之了簡を以毎々上書抔仕候様成行候は識見之所及人に小異有之可奉感 天聽猶又 神州之御體は鎌倉以來幕府を被建置候に付列藩以下直に奉汚 天聽候は其事之得失は論に遑無之幕府を輕蔑仕候筋に相當 御威光不相立候幕府之御威光不相立候は列藩各 朝廷を戴 勅命を乞諸幕府を要し終に群雄割據之勢醸成し海内

分裂天下之公論も歸着する所無之却る外夷之侮を招き御國威及衰弱可申候乍憚將軍之御職は上 朝廷を御敬戴下列藩以下を御鎮壓天下之公論を被成御摠括候

叡慮御遵奉禦侮之手段被成御行届候様可被爲段申上迄も無御座候事に付今般 公方様御上洛御國初之御蹤を以列藩豫參被 仰付當時御初政に付天下を御更始之思召を以御國是如何被相定候可然哉各存念申出候様被

仰聞列藩建白之旨趣御熟考 叡慮被成御窺 勅諭 台命を以御國是御確定之旨列藩へ被 仰渡之衆心和協御國威更張之御發端區々候儀は有御座間敷と奉存候萬一豫參御斷申上候歟或は御國是御確定之旨違背仕候者有之候は、

勅定 台命を蔑如仕候儀に付無據嚴譴被 仰付候共申分有之間敷奉存候此段等を御評議之上御内決之旨被 仰聞被下候は、私儀に上京仕 御趣意之大要申上にて可有御座候重大之事件容易に申建候段千萬奉恐入

候得共 神州御安危之境此御一舉に可有是候御事且最前深重御内慮をも被 仰聞置候儀迄申に付不得止申建候儀に御座候間不惡被 聞召分可被下候以上

文久二年戊五月

松平大膳 太夫

三 薩州より陽明家を以建白

一今般中山を以御内情奉窺候處献芹之微志 上達不容易御賜且前左府様より御内達之趣大納言様御内旨御拜領物被 仰付候實に武門之冥加不過之恐入候依之其方内々使者指立候間篤と右之趣意相合御禮取成可言上左候御縁談一條御請候様可奉見申上候
一天朝危殆實に燒眉之急に候間被爲惱

叡慮候御儀此節中山詳細之御左右に共悲涙涕泣に不堪之次第に候 和宮様御下降に付被 仰含候御内策も被爲有由に候へ共是と決而頼に相成候御事に有之間敷哉能々幕府之事情熟察致候は、如何様小人俗吏たりとも當今に至り天下之人心名分明にし

天朝を重し幕府に背候判然たる形勢と既に一昨年上巳以來夷人殺害水府之混亂其外浪人奔走等之次第に詰る處無事に不相濟一身に疾痛之來と言事十分奸察致し表は無實の勢を張り内に深淵薄氷之恐を懷候儀御案内に有之へく候へ共苟且偷安之情を以天下國家之傾覆は少しも意とせず己之榮利を不失候覺悟而已に明日之事は如何にもなれ今日に全を計營致候様に有之右具眼之者より論候へは彼か長久を謀り候事は國を失ひ身を亡す之危謀に少しも天下國家之上に心を用ひ衆思之向ふ處を取用候は、徳川家之興覆隨而一身之榮耀無疑候へとも和漢古今衰世に當候而國を亂し賊臣之蹤跡は一轍なる譯に是に依て考るも

和宮様無理に御下し奉り候は一朝一夕之奸巧に無之御下向被爲成候上は掌中之物に中々 勅意を恐處置を改るは思ひよらぬ事に此上は如何様之邪謀奉運候難圖至變此事に候勿論奉申上候も恐多候へとも所謂之秘策も有之候段承及決而實說に可有之哉縱令世説なりとても察せずんは不可有之時節と存萬一彼に先せられ制を受候は主客之勢と相成囓臍之悔不久儀と奉恐懼候

一御一舉相成候様篤と熟思致候に申さは兵を動すと申譯さして國家之重事候勿論 天朝御安危に關係致候誠に不輕次第奉恐入候へとも前條之通危急之御時節に付は不得止事御時宜に候間不肖之我等たりとも苟も王臣として難奉忽候に依り

皇國復古之御大業被爲在度奉誠願候就而は京地十分御守護不相備候は縦令非常之

聖斷被爲在候も戊午覆轍を踏候様に却奉増御難題甚恐入候に

付御發擧之上は必勝之利を謀り興覆無疑之節を盡し其上之所は臨機應變之處置候様有之度奉存候我等不智短才にして深謀遠圖も無之如斯大事始終之得失を謀り其術乏候得共内策之次第左之通

一 供人數五百人餘召連不日上 京可仕事

但陸行に急速に間合兼候間久間崎又は阿久根邊より天祐丸へ乗舟致し左候へは京地致着人數之儀は一組六十人にして四組二百四十人外に什長二十四人組頭兩人側役兩人上下二人平均にして八十人次に定式方側向三十人同表方十八人足輕四十人迄大凡見賦り帶刀以上百五十人餘に相改候

一 當地出立兩三日を置守衛人數五組三百人出立申付又兩日間を置四組二百四十人同斷小倉下之關迄出張鎮置候事

但天祐丸大坂着之上則小倉下關迄差廻候本文人數前後繰廻し上坂せしめ且急に用意鎮置候下之關糶米右人數へ一結に積廻し可申尤兩度

運送五日に不出候間其上は大坂碇泊非常に備置候事

一人數凡上 京之上組頭一人へ三組百八十人を江戸芝邸へ爲警衛指出候事

一 上京之上陽明家參殿篤と建議之上御内意奉伺其上乍恐滯 京守護可仕候 勅諭被下右之通 御守護十分相備候上は非常之 聖斷を以表向關東へ 勅使被爲指立候趣は一橋公御後見越前先公御大老に出世相成候様にて然て尾藩長藩仙臺因州土州へ別段 勅命被下趣徳川家へ云々 詔を被下候各談合に及 皇國之御爲に志心を盡し可抽忠節萬一違勅之廉相顯候は、國家之奸賊執政安藤速可加誅伐旨被 仰出左候へは有志之諸藩合從致し勤

王義舉無相違其節に臨候へは勢難及故幕役も戰慄して 勅意を捧し奉らんは無致方萬一長藩其外水府諸浪人四方蜂起して義應可致と案中之勢に御座候何れ之於關東成敗相決可申候

一勅を被下則關白九條御退職左府公關白御歸職 青蓮院様之御幽囚を御
解き萬機之事無大小御談判被爲在候様被 仰出候事と奉存候事
一右人數上 京守護仕候上は要樞之場所地面御預被 仰付候様奉願候
一當時種々議論も有之此期に臨候上は徳川家を捨て大義を唱ひ正々堂々
天下之義旗を揚干戈用ひる理有之哉に候得共夫は首尾之詰り甚難問に
有之畢竟罪は幕役に有之故眞實 皇國復古志心を抱き盡忠之者に候へ
は是非干戈を用ひす不傷國體成就出來之様策を立度勿論先々より徳川
家御扶助公武御合體之
叡慮に先君遺志も其通りに候間何國迄も右之御趣意相□度奉存候乍
併不得止事出來にをいては不及是非儀に可有之と奉存候
右之通概略之定策候間巨細相伺候上萬篇治定早々駟下り夫を期して日
限等可相決仰て天時を鑑俯て人事を察して不可疑之時機此一舉に可有
之候事

文久元年酉十一月

右は文久二年正月十六日陽明家より拜借寫取候吳々如何様被致度十
分に候得共本文之次第御察し被成下度候

極密に御申越之條々實以肝要當然之儀無左候は後々如何可相成哉も
難計第一

皇國之安危に拘り候儀實に以悲嘆不過之尤上にも此儀深く 御痛心被
遊候事故申出度は十分に候得共九條關白其餘にも彼是之奸賊多端之事
故迎も 上より被 仰出候儀六ヶ敷中山大納言正親町三條に誠實之
人體乍去新役之儀迎も奸賊之人體出頭之折柄中山大納言正町三條兩人
に

叡慮を伺事取計之儀は相成間敷併正親町三條も深痛被致候様子關白に
は關東一體之了簡且又右に隨從之人多端に候得は迎も關白相退候儀如
何にも相成間敷儀吳々痛心迫り候次第仍何卒薩州長州仙臺土佐之餘

有志之向諸藩幕府へ上書御□届閣老へも右之次第を束し其上御採用無
之候は相成間敷表立諸藩
叡慮を伺候事にて成間敷哉右之通に相成候上は兎も角も
勅諭被出候哉と察上候何分 公武奸賊を退かねは
叡慮不被爲立候何も恐入候事不惡御覽察願入候也
原本に云右仙臺藩玉虫左大夫より手に入とある

四 長州御所置之趣書付

先年以來 公武御間御趣意齟齬之趣有之哉に於世上窺計義論紛興人心解
散其罅隙に乘し外夷之覬覦を生し不測之變出來も難計且士氣漸々退縮に
趣御國威不相立様にも可相成哉と不堪杞憂過る午年及兩度 公武御一和
叡慮御遵奉にて待夷之御所置被爲在度趣幕府へ及献策候然處其後も外夷

之猖獗日々甚敷内地不慮之變も度々出來時勢切迫に相成終には天下之大
患にも可相成哉と存付徒に致傍看居候は
天朝幕府へ奉對年來之志も不相立先祖已來之遺教にも不相叶儀と日夜致
煩念時勢熟考候處右物議紛興鎖國を固守し或は開國を主張人心煽動余程
御手煩に相成候得とも其歸趣は御國體難相立儀を慨歎仕候外有之間敷御
國體儼然と相立候へは開鎖は時之宜に隨ひ御處置に相成候可然右御國
體之基本と申候へは於幕府是を無御疎御事には候へとも今一際
天朝御崇安之御筋相立條理判然御合體之御扱世上に顯然と相成年來人心
之疑惑一旦氷釋仕海内之議論純一一致に義勇を以干城敵愾之任に相當候
は、御國威凜然と相成其上にて開國之御大規模を被爲建武備益御張興に
る航海之術廣く御開彼か巢穴を探り控制之御籌略被相立度との主意を以
去夏家來之者を以閣老へ及演達置候處去冬參府初る閣老へ爲對客罷越候
節最前建議尤之事に付追及相談儀も可有之段久世大和守安藤對馬守よ

り挨拶有之追ふ大和守より達有之極月八日右趣意委細書面へ相認差出候處

公方様達 御聽此往取扱をも被 仰付度 御内慮に候段舊臘晦日大和守より家來之者招呼演達有之候處右は不容易事柄に付熱考之上御請可申上候間暫御猶豫之儀申入置候右に付るは御高論も可有御座候は、無御腹臆御教諭被下度致御頼候

右に付藩中永井雅樂參 洛より

此方様と薩州様へ罷越候由江戸御留守迄申來候由(文久二年三月九)

五 薩州侯内々御家中へ御示之書付

和泉様御儀何編是迄國政向御内談申上且先度公儀より御内汰沙之趣有之我等實に多幸之至に候然るを今度二九へ御住居被遊候に付猶又表向御介

助奉承置候間以來被 仰出等彌以嚴重に相守候様可承計候事

戊三月

六 和泉様被 仰出之書付

去る午年外夷通商御免許以來天下之人心致紛亂各國有志杯と相唱候者共尊 王攘夷を名とし慷慨激烈之説を以四方に交を結ひ不容易企いたし候哉に相聞候へとも當國にも右之者共へ私に交書翰往復等致し候者有之哉に畢竟勤王之者に感激いたし候處より右様之次第に相及候筈には候得とも浪人□華之所業致同意候るは當國之禍害は勿論

皇國一統之騒動を醸出し終には群雄割據之形勢に至り却る外夷之術中に陥り不忠不義無此上義に別る輕事奉存候拙者儀

公邊之御爲聊所存之趣有之候付以來當國之面々右様之者共に一切不相交

命令に従ひ周旋有之度事に候若又私に義を重し絶交いたし難き面々は有様に申出候は、其譯に應何様成共可致所置候尤此節之道中筋且江戸滯在中右體之者共推參いたし候共私に致面談間敷候自然無據譯に依り致應接候とも敢不致義論其筋之者へ致談判□□可致返答候乍此上不勘辨之族有之は天下國家之爲實に以不可然事に候條無遠罪科に可被行事

御同人様御直書

拙者より書取を以申渡候事遠慮に候得とも當時世上情態何とも不穩趣に相聞候に付不得止先は爲相達事に候其後猶又致懇教候處畢竟上威之輕處より群下類を引に至り候儀に御當主は勿論拙者にをいても心痛至極之事に候士風沙汰之儀は此前より追々被仰出置候近比にも再往申渡に爲相成事に候得共方今之模様には非常之原事到來之節致一和處無覺束存候皇國に生れ候もの誰とても

王朝尊ひ夷狄を惡み候情意は有之筈に候若其志操無之者を禽獸同然事に別に勤王家之誠忠派抔可申様更に無之事に候殊に若年之面々免異様にして放恣者共有之哉に相聞へ是以先年より爲被仰渡事に候處其節とは相變候風儀に彌以不宜次第に候士夫跡律儀廉潔を専らとして社本意之事と存候何様文武研究いたし其武士とは被申間敷候且郷士以下家來末々に至り候も右様之者共有之哉に付猶以不可然事に候條右之趣奉行頭人能々相心得支配下へ丁寧に申諭候様父兄は同郷軍長之者共より心得違無之忠節を盡し候様教戒有之度存候事

戊三月

一三月十六日和泉様鹿兒島御發駕に相成候事三月十五日石清水社御法樂

翫藤花

藤浪のなみくがらす咲汝見はりみの教よなひく世の春

社頭藤

神垣よりけてそゑのむ藤おその花よさりゆく春よあへとは

小松帶刀詩歌之事

聞說中原橫虎狼、誰先慷慨唱勤 王、腰間頻動双龍氣、欲向東天吐彩光

風光日々新

日よそひて風の去らへも梅りえよきゆるうくゐはのとりぬる春

右小松は薩藩家老之由

七 京都市中評判之趣同町人書取

于時文久二戌年四月上旬に西明之能將薩州之大主御實父御本家御隠居格
島津和泉様御年四蒸氣船にゑ多人數浪花へ御着同十四日伏見へ御着同十
五日夜八時御供揃にゑ御上洛十六日未明に京都錦小路通東洞院東へ入る
西魚屋町と申所に薩州御屋敷へ御着隣近町辻々へは町名之高張灯燈を立

て家別に盛砂手桶掃除致し灯燈を差出し厚御もてなし則十六日朝四時分
より御家來三百餘人御召連近衛殿へ御入殿御縁組之儀に付ゑのよし折柄
序に近年外夷はひこり關東政道正からす趣御呼出儀奏衆へも御談合既に
天子へ奏聞之事取極り其夜八つ時比京御屋敷立寄なしに伏見へ直に引取
是は所司代へ
の遠慮なり翌十七日早朝より近衛殿より御使伏見へ島津和泉 勅諭に依
て滞在被 仰渡候事則十七日晝八時分伏見より千五六百人之同勢にて京
都御屋敷へ御入俄に近町へ旅宿被 仰付既に廿五町懸りに御旅宿に成り
御滞立三十餘日はより風評大かたならす終世俗薩州大明神と云
一右御上洛に付諸司代酒井若狹守大びつくり被致薩州より打取に被參候
と被思召候よし十五日初夜比より軍立陣鐘陣太鼓打ならし鎗長刀拔身
にゑ待受二條城近町へ夜通しに今にも軍起り候と老人童子は遠方へ預
け藏は目塗をし道具も諸所へ運び火事のことく騒動大かたならす翌十
六日は何てもなし薩州にはけ様之儀夢にもしらす大わらひ

薩長京地の米一合も御用なし皆々御用意也依る米の上りもなし受能く薩州泊り上五百五十文 下四百五十文宿亭大祝

其外御心附澤山なり

一四月十六日七日兩夜月之出紅のことく

一四月廿二日夜伏見京橋寺田屋と申船宿にて薩州勢之内七人打取云々

寺田屋へは惣普請薩州よりいたし金百兩被遣大祝跡は大繁昌

一長州御人數四月上旬より追々四月廿八日江戸より若殿御上京同勢千餘人御滞留

一五月廿二日晝比關東へ御勅使大原三位様御下向三位様左衛門督様と

五字不明

御昇進御藏米三千俵中納言大納言一同之御位之よし大内無双

忠臣也

一同朝薩州和泉様同斷關東下向御同勢千餘人

御所より吉例を以和泉三郎と改名被下此和泉三郎と申は往昔右

大將頼朝公之御流之御方和泉國何とか申濱に在住吉大明神の御神託に在近衛殿御逢にて御引立に相成候御方三郎と申島津家の御先祖なり其吉例也と云

一六月十三日京都諸司代酒井若狹守御奉書到來五日之支度六日之道中是迄は作病此度は本之病氣家老斷也六月九日關東へ下向之よしへこ引大將大評判悪し

一大坂城代丹波宮津松平伯耆守御奉書到來六月九日伏見通行關東下向其後評判不分

一諸家様御人數追々御上京之噂

一九條關白殿入道して鞍馬之奥に隱居のよし

一會津侯御斷之噂御人數少々三條通り宿屋へ御上京いかゝの事也

一六月廿三日近衛殿關白拜賀

一長州屋敷河原町二條下る近隣町家御買得に相成近日御普請取懸り加州

屋敷同斷一昨日當りより外かこひ御普請取懸り

一其外洛中洛外寺院大地は諸大名方加州始中國九州四國關東皆々御請取最早御本陣に相成候様之寺一ヶ寺も無之是は 將軍御上洛之御手當之よし

一薩州早打飛脚松方三之允より青木彦兵衛聞取書

但松方身分は御使番位と被見受候飛脚番之者兩人附添居候

右松方は四月廿九日京都出立に船中風悪く當月三日備前鞆より上陸いたし昨七日小倉着未之上刻打立今八日晚時分熊本通行仕候に付彦兵衛先入馬所へ駈着役人へ申含置相待受直に坐敷へ上げ此節罷下り候御用筋相尋候處此儀は何分にも難申聞候段斷申候田中謙助有馬新七列打果之次第尋候處此八人之者打取之儀は列國に對し愧敷事には有之候へとも無餘儀事實に面目無之とて落涙咄申候根元大坂着後多人數九條様酒井様是非討取可申との議論を發候間九條様酒井様打取之事はいと易

有之是は枝葉之事に夷狄を拂之策此節之急務に此節押立左候へは餘は自ら全功相行れ可申且此節は 京都之御威光計相望候譯にも無之列藩何方も以後御威光相立候様有之度此地に至着仕見候へは以前御國許に之見込よりは幕府弱之模様付之は手段も相變不申候之は難相成棄小机大之意味申論しに相成候間餘は皆納得仕候得共同勢三十何人は是非々々至急に討取不申候之は相成かたき趣申募議論押張候に付和泉様には深遠之謀慮有之機を以度々御諭し有之候へとも一向に聞入不申甚敷に至り候之大坂屋敷より伏見屋敷へ參り候途中より亡命にをよひ候間其節も懇命有之愈以諭に相成候へとも八人之者は決之聞入不申人迄に之も是非討取可申段言張一圓承知致し不申候中九條様酒井様へ此事露顯に及ひ既に混亂にも至り可申勢に相成候に付乍涙無致方切腹被申付候處夫も聞入不申候間不得止直に打果申候由尤右討手之方は朋友之者之由此節論を受候人の中も有之いつれも涙を流し袖を濡申との

咄仕候

一長州侯世子江戸より下り懸四月廿八日 京御着其儘滞に相成居候由每
之供廻よりも大分之人數に相見候由

一久世様上 京は病氣に御斷有之板倉周防守様出京之筈に候由

一岡藩小河列其餘諸浪人何れも和泉様御所置に隨ひ其期相待居申候由彼
地發足後は少々之事差起り候も難計萌見込之筋も有之由噂仕候也

五月八日夜

一薩人伏見に打果之名前左之通四月廿三日伏見寺
田屋伊助宅なり

有馬新七 淺手 奈良原喜八郎

田中謙助 山口金之助

柴山愛次郎 深手 道橋五郎助

橋口傳左衛門 江夏仲右衛門

拔一即亡
刀番死命 同 壯助 鈴木勇右衛門

森山新五左衛門 大山格之助
弟子丸龍助 即死 森岡善助
西田孫五郎 鈴木富之助

八 薩州江戸御留守居より届之書付

修理大夫實父島津和泉守事先達御届申上候通江戸表に用向有之致出府候
途中大坂表へ諸浪人共寄集り相待居不勘辨之儀申立候に付程能申論候得
共不致承服候に付伏見まで罷越兼近衛家縁談之儀内約に付酒井若狹守
様へ御届上京致參殿候節右浪人共事情御内話申上候趣御座候處達 叡聞
儀奏衆より別紙之通
叡慮之趣御書付を以被 仰渡候間去る十七日京都屋敷へ罷越滞在罷在候
此段御届申上候以上

四月廿五日

西筑右衛門

別紙寫

浪士共蜂起不穩企有之處島津和泉取押置候段先以 叡感 思召候別御
膝元不容易儀於蜂起は實に被惱 宸襟候事に候間和泉當地に滞在鎮靜有
之様に 思召候事

九 京都御所司代書付

頃日道路之風説を承候處西國筋之浪人共多人數兵庫大坂邊へ集り彼是不
容易暴論を唱候趣に有之尤支配國外之儀に付巨細之儀難相分候得共全虛
説而已に亦も有之間敷哉就るは官家之方に諸藩士へ御直談之儀は兼御
規則も有之事御承知之儀に奉存候へ共萬一御行違之廉も出來自然去る午

八月八日之覆轍を蹈候様之儀も有之候而は以之外之御次第に可至と深御
案思申上不堪苦心内々申上候既に今度格別之御縁組も被爲在
公武之御中御一和之上之御一和に被爲在候處唯今聊に亦も御異論之筋相
生候而は實に以 公武之御爲不宜候儀は勿論東西諸臣に有之候而も深恐
入可奉存候事に御座候必々卒爾御所置無之様仕度奉存候此度浮浪之輩暴
戾之説を唱候由に候へとも奉對

天朝動干戈候様之儀は普天之下卒士之濱如何様卑賤之者といへとも人心
之固有する處決而有之間敷御座候間必々御驚動被遊間敷奉存候乍併反逆
野心之徒有之萬々一
王城地動干戈惱

宸襟候者於有之は私所司代相勤候限りは若州一國之力を盡し候而勿論諸
家御警衛之者共指揮いたし誅伐可仕候間被遊 御安心必々御輕易之御取
計無之様仕度奉存候是全 公武之御爲盡微衷候儀に御座候右之段は決る

表立申上候儀には無御座候得共全御爲筋を存上御兩役限り内々申上置候儀に御座候事

四月十日

忠義

廣橋 | |
坊城 | |

右廣橋坊城兩公は傳奏衆忠義は酒井若狹守なり若州小濱十萬三千五百五十八石役知一萬石

一〇 大坂詰藤井來狀之内

京都之一件種々取沙汰仕右に付而は所々聞方も被仰付候得共都而雲上之秘事と相聞駈と分り兼候由御座候併其主意は薩州より外國交易一切被

差留度との願に御座候由又長州様より矢張同様之御願と申内是は長崎と箱館之兩所迄にして其餘は御斷に相成度との御申立に御座候由右に付而江戸より久世様御呼登に而御參談之筈之由に御座候夫は道理相分り候處亦外々如何成事に御座候哉九條様と御所司代を奉害候企致候者有之由聞取書別紙之通に御座候何様解兼候事多事實難量御座候嘸御國に而も色々評判可有御座候右之風評に而米金之双場引立申候俄には變も御座有間敷候得共外國一件は甚氣遣歎成行今之内御手當最第一之事と奉存候以下略之

五月二日 (文久二年)

同月十一日熊本着

一一 五月朔日薩州大坂御屋敷御家中にて聞取書左之通

一島津和泉殿御上京御供之人數八百人外に別段警衛軍方士席御小姓組貳

百七十人に壹人宛に引廻付添大組頭貳人被差添候

高六千石程 高五千石程

本郷庄左衛門 益田 民部右上下惣人数千三百貳拾人程

大御目附に御家老兼高万石程 菱刈李之助 軍方御小姓五拾人外に引廻五人

右は大坂御屋敷へ四月十一日より詰方に相成居候處菱刈方は和泉殿より御召に同廿九日上 京に相成候事

是より以下は聞取書之要旨計書抜

一同月廿三日夜伏見旅宿混雜之様子は島津家軍方大坂御屋敷内に多人數滞留中町御長屋に被圍置候浪人頭中山大納言殿諸大夫田中河内介同岩之助より軍手之面々を此節企候内に爲致同意候に付軍方之御小姓組上京を引廻し永田左一郎へ申聞候處和泉殿より大坂へ相詰居候様被仰付置候御意筋も有之候付決御差圖有之迄は上京難相成段申聞候處其内右之面々家來も召連不申銘々單物腰に下げ其儘大坂御屋敷を罷出伏

見へ罷登候内久留米之浪人貳人同様に都合八人

一右之趣大坂詰菱刈方より早打を以和泉殿へ申入候由

一急速に和泉殿御供之御小姓組三十人被差越理解に相成候由尤其内八人旅宿へ入込

一主命たり共一旦同意之上は不承知候段申候に付討手方主命を背候不忠者と一言を懸候處早抜刀暫時打合浪人七人仕留八人之内一人は立退き居混雜相濟候上右様に相成候趣意一通り申伸自殺に及候由

一京都より被差越候三十人之内壹人は即死七人は薄手深手に伏見へ引取深手之内二人四月二十八日果候由

一殘廿二人京都へ引取之道に浪人六十人計待受居候へとも何之手差も致し不申尤四月廿三日混雜無之候は、浪人六十人計は旅宿之面々と申合其夜京へ入込所司代を討候企有之たる由翌廿四日より島津家軍方之内多人數伏見稻荷道竹田道へ浪人押として晝夜相詰由に御座候

一右三外今度軍方に上り不申面々貳十人御國より拔懸大坂御屋敷へ着候付菱刈より和泉殿へ相達候處御差圖近邊之町家に被入置候處御長屋に被圍置候浪人共に致同意候儀明白いたし及理解候處致改心候に付御國へ被差下候よし外に百人計も浪人に致同意候者有之哉に候へともいづれも改心に付此分は和泉殿思召に而京都に留に相成候よし

一大坂御屋敷内々滯留軍方拾人之引廻永田左一郎廿六歳

右は最前於大坂六人不得之次第に付段々及理解候へとも聞入不申伏見へ参り候に付其身にをいては此節格別之思召を以引廻被仰付置候處前文之通預り之面々理不盡之次第に付頭分之申分難立四月廿三日夜自殺之所心付候人も無之翌廿四日朝見出候處落命に至り不申子細相尋候處右之趣致噂無程落命之由

一右之次第菱刈より和泉殿へ相達候處年若之者主命を重し義を不忘段奇特之由に而永代八石被下旨和泉殿御自筆を以被下候よし

一四月廿九日晦日兩日之内京都より浪人共大坂御屋敷へ三十人計被差下其内貳人は土佐御屋敷へ引渡三人は久留米御屋敷へ引渡に相成申候外に薩州并佐土原浪人三人尙浪人頭分は田中河内介は手錠足かねに而御國へ被差下残り之面々は未だ相滞居候よし

一和泉殿御嫡宮之允殿御呼登に而近々御着坂御上京之由人數千五百人

一伏見旅宿へは爲及迷惑旨に而即日當坐爲挨拶金百兩被下よし

右之通承り候に付此段申上候

五月朔日 (文久二年)

橋本喜源太

一二 井口訓導江戸より來書

明日早飛脚被差立候由に而一書拜呈仕候彌御平安珍重之御儀奉存候私儀

無異儀罷在候間御休意可被下候扱此節京攝騷動之一件に付るは御國も餘程動搖仕候由併

太守様益御機嫌四月朔日御着坐之由に好き折柄御國內も先は鎮靜に赴き可申と恐悅仕候片山様にも未だ京師より御歸國無之内騷動と被察若御歸國に相成居候は、大體事情も相分御國も斯迄うろたへには相成申間敷筈と致尊候事に御座候京師方角之事は此許よりも

御國却る相分居候事も可有之候得共猶此内外聞取之趣一通り書付懸御目申候

此節騷動之一件は長州薩州元同腹に去年來聲息相通居候由薩州も實に惡意には無之

公武御合體に本朝士氣を振起仕度存念に有之候得共迎も是迄 公義御役人之分際に張り立て見込無之候に付 京師之力を假る關東之役人を差替すしては何事も被行申間敷との事は長薩同様見込に長州は

去年中内々京師へ建白之趣有之 公武御合體京師にも開國之規模に被立

戻候様手都合致し置京都へ差出候書付私手に入候得共漸夜前機密間に分夏之比

より永井雅樂江戸へ下り久世安藤之兩閣老を説き付け

禁裏御遵奉可被遊儀を御勸め模様因るは御役人替之儀汰沙をも取持候心組に爲有之哉にも相聞申候薩州には固より長州内意には候得共元來人之跡尻を追候儀は不仕國柄に迎も穩成扱而已にては被行兼可申候に付幕府驚愕せしめん爲竊に浪人を誘ひ諸藩之慷慨家を煽き立斬奸主意書之趣を以所司代酒井若州九條殿下を刺殺罪を關東問へき勢を示し候手段は昨年より有之既に去冬 京師へ建白有之 勅命を關東へ下し御役人其人に非らざる事を被 仰遣又薩州へ命して人數を率ひて江戸へ登り役人之黜陟をもさし引可致旨被 仰下候様申立に相成候處はや長州之趣意相貫き居候哉 徳川家を動搖爲仕萬一内亂を生し候るは彌以外夷之術中に陥候事に付薩州建白は御取揚無之由に薩之君臣逡巡致居候へとも浪人共

固り其誘にてをち／＼登り込居無味に引取候様にも難被致和泉殿此節發途に相成程能取鎮に相成候筈之處浪人とも大坂に待受ひた早りにはやり候故大坂薩邸に留め置近衛殿に縁組之内約有之由に伏見より上京被致右浪人共事情内話に被及候處早速達 叡聞別紙御書付之通滯京被仰出候内浪人共坂邸より抜け出駈登り候様子に付京都より家來數輩を遣し伏見旅宿高田屋と申處に於出會宥めに懸り候處浪人共和泉殿は差置我々計りに亦も初念を遂んと聊承伏不致 京師に可押登勢に付不得止浪人之内薩人八人打果和泉方にも即死三人一人即死二人深手とも云三人は他所にて漸く取人一人に付不負とも云都合十一人之よしに鎮め形に相成候由に御座候安井仲平は和泉殿自ら事を起し置候は鎮靜之功を立候趣に取成し威勢を張る之手段狸之あはれたる様に誠に大事を起すにはあらず其證には人數少しと云

小鹽謙一聞來る

筑前醫師 公義へ御目見致候者因幡文貞話筑前侯此砌播磨路此處まで登り之事聖堂

取同沙汰大倉谷まで登りに相成候處先年國元立去候和學者小金丸何某と申者近年浪人に立雜り京攝之間に罷在候内情承り候得は和泉殿は浪人共盟主に取込候も迎もはか／＼敷人柄に無之幸筑前侯登りに付途中へ廻り盟主と成し若不承知に候は、殺害に及可申との企を聞遽に返忠之存念を起し候處無味には迎も足抜け出來間敷とて和泉殿へ狼藉仕懸け被召捕筑侯へ引渡に相成候處にて右之企申出候に付大倉谷邊に四日計滯留外聞を出し探索之所此者申分に相違無之病と申立引返之由林家之用人此田權之助と申者出會話酒井右京亮様家來金子泰甫より承り候由和泉殿も播磨路邊に於浪人共仕懸盟主に被成吳候様逼り候に付程能申大坂迄連來り右之者共は詰腹切らすとも云些不穩閉ち籠置れ候由此兩條は致暗合安井見込と大に相違何程に可有之哉備參考置候事近衛殿參り早鐘に於和泉殿にも懸る内 勅を被受候は今更 公義に對し心配に被存居候様子に御座候此後如何之所置に相成候哉何方よりも耳目を測て罷在申候前文之通實

は長州同腹に別れに手段を被設候哉に候處 幕府には折節安藤侯も退役
水野和泉守様板倉周防守様熟も一時之人望に長州之建議も既に 公方
様へ御耳に達し御取揚に相成先月半比には一橋様越前土州老侯も萬端平
常之通りに心得候様被 仰出去る十五日より御旗本一統騎馬登城先徒三
人草履取迄に既に昨日四日勝麟太郎様へ参り懸氣を付見候處駕乗候旗
本體は只一人見受其餘は皆騎馬に御座候何様水戸家之冤を雪き儉約之
基を開き幕府一新之兆と竊に目を拭ひ申候得共何卒間に合かしと祈る事
に御座候永井雅樂も去る十六日京都出立廿日比江戸着に京攝動搖之様
子も見聞致し且長州君侯御上京無之は
叙慮難伺取由に君侯も當月廿日比には此元出立と申事に御座候和泉殿
様子兼御聞及候所に 公義隨順之人に御座候由之處此節之振舞甚以
疑敷安井見込よりも後之兩說實正に宮部鼎抔は只慷慨家之言に煽動さ
れうろたへ出たる物とのみ私儀は相考申候併しケ様之事柄不容易儀に

一途には難押極畢竟は薩州むくつけなる風儀之上さすか同腹とは乍申徒
らに人に先きを被爲候は衰へと申様なる所より長州之別途に出るより
添書あり
(御役人替等けぬき合にて西國には未だ聞へぬ内と見ゆ又長州ともかくそ
く之様に見ゆ)行違たらと相成候共には有之間敷哉私儀も外國には
行はくれ此節之御奉公に京師探索に罷越見申度夜前三池家へは話合置申
候若許を受候は尙彼方より御通路可仕候薩州も

勅命を受候抔外見には羽振好様にも御座候へとも土臺大事を仕出候丈之
仕込にも無之由にて國體淺露に相見へ少し心ある者は大分字本を見くひり
候様に被存候何様 此方様には御國內きすとも不仕様堅固に御取打しは
らく様子を御覽被成候は眞偽之境も相分可申未だ天下分目之戰と申に
も無之候得は日和を見る之嫌疑も無之譬ひ

天子を挾んで諸侯合する人有とも海内之文化如此相開け候上は不理なる
號令は萬民受引申間敷候得は内輪之覺悟第一に機會を見澄し必に後之

先之突き所可有之候長州之仕方は心は如何様にもせよ先は順路に赴き候組立に付脇方より差ませ不申手一盃に致せ置若風波も起り候節は眞實に御手を被添是非大業成就爲致候様有之度萬一左様にも御座候は、所謂君子は人之美を成と申者にてさすか御大國之體を得一入奥ゆかしく心有人には彌以感心可仕候武將感狀記に其人は覺不申途中に親之敵に出逢候者有之相手は強勢にて無心元傍觀致居候處若は危く見へ候に付敵に向ひ跡を用心せよと聲を懸後に氣移り候處を若は槍り付け親之敵を討濟候事有之心ある武士は親之敵を討る人よりも傍の人を賞候由覺へ居事之大小は殊なり候得共誠に理りある事歟と考合申事に御座候此節之儀は天下之大事一國之私す所に無之儀は申迄も無之片山君には折々御殿にも御出可被成定る御後見も可有之御座候へは爲御參考卑見を述申候間三先生を奉初講堂當り何卒篤と御研被仰立筋も可有之哉と不願龜漏寸志を奉呈候餘は後鴻に譲り勿略仕候以上

壬戌五月五日當賀

井口呈助

正徳判

片山喜三郎様

築瀬騏兵衛様

加々山權内様

尙々柏木氏初右田井上三御奉行一時に被仰付候由何れ人望に珍重々々多賀々々

一三 五月十一日主水様御直命聞取

今度 主上叡慮之旨於關東夷戎交易御取扱後逐年萬民次第に及困窮候趣被聞召深被惱 宸襟候折柄今度島津和泉上 京申上候内には夷戎打拂

之儀甚 御感悅に被 思召彌關東之御處置筋改正に至候様との 叡慮に候たとひ於關東交易御改革無餘儀次第に有之候共
天朝之御取意彌貫通被遊度との御存念に被爲在交易一條之儀は丑年以來假定約之趣を以十ヶ年之猶豫申上候先其分にあさし置尙又
和宮様御縁組御一和之譯を以五年之間御打拂御猶豫被 仰出度との趣關東より諸藩に被 仰出候上之事に候得共 勅書之趣自然關東異儀申立候趣も有之候は、將軍家に無御係
天朝より公卿引卒し大藩之有志之被 仰出候御存念に被爲在候趣畢竟關東之御處置筋老職共暴政之儀と被 思召候依之右一條之御改正被遊 玉體はたとひ如何成蒙神罰北條時代之如く遷島被遊候とも聊御厭無之專一神州之名義を汚候はならず剩萬民之國窮患心難默止片時も早卑賤之輩安堵御代に服候様被遊度との
叡慮之旨御座候由

一四 五月十五日新清二位長谷三位岩倉中將之外

書記御用一同連署

今度關東へ 勅使被差下幕政改正之儀
叡斷之三策被 仰下候に付は於幕府
叡慮徹奉行之節は夷戎膺懲之師可舉と存候萬々一御請不被申上候とも再應徳川家長久を被 思召候厚腆之 叡慮被 仰下候其上戻
勅諭暴政相發候節は 朝廷之御威光不被爲振候はならず列藩不伏速に發兵端候得共天下二分之勢相成候歟左候節は 朝廷安危何とも難申上恐入候儀と奉存候尤御結局之 叡慮は奉恐察候得とも至其期萬々一被動聖慮候は 皇國之威不被爲立列藩勤 王之忠魂廢弛し 皇國彌犬羊蹂躪之衢と可相成儀は必然候間 叡慮斷然不被爲動日に舉國一致攘夷之成

功可有之存候前件之儀申出候も多罪候得共
皇國重事不堪默止

宸慮御決意之處乍恐奉伺度言上仕候事

一島津三郎様御下向去る七日京都御着直に近衛様へ御參殿之處御用之儀
被爲在候間御參 内被成候様議奏衆御取次を以 御内勅被爲蒙去る九
日近衛様御參殿之上關白様より御拜領之御直垂を御召替御參 内被成
候處不容易御懇之被爲蒙御褒美 勅御劔一振被遊御拜領候段被 仰渡
候間此段得御意候以上

四月 (文久二年)

太力 大平をおたぬはものはさけまいをそらのこはひをなをましもく

採襍錄卷十

一 長州侯於京師邸家中面々へ被諭候直書

從來存意 官武に申立候は偏に 天朝に忠節幕府に信義祖先に孝道相立
候決意にて今般上 京
叡慮之所被向盡力周旋仕候段御請申上候然上は如何程の艱難にても忠節
確守し信義孝道隨て相立候處置せしめ候付我等旨趣を體し爲國家奉公に
おゐては本懐たるべく候 戊七月 (文久二年)

二 長州侯於京都邸中其藩中へ爲讀知

去夏以來 公武之御間御周旋被盡御力候は

天朝の御忠節幕府の御信義御先祖様の御孝道被爲立度との御趣意被爲在
今般御上 京之上 叡慮之所被爲向御周旋可被遊候段御請被仰上候に付
ては右三道共全相立何も無御手障可被成御整候は勿論御事に候得共萬一
も至極之御艱難に御遭遇被遊御處置候節之御心算豫め御決定不被成置候
ては竟に御趣意筋も不相貫徹之御事にて衆議御参考御熟案被遊候所時に
寄り處に隨ひては天倫第一の忠節を被遊御純守候て信義孝道も從つて相
立候御場合に可有之其節之御處置御決心之趣も被爲在候に付此往御周旋
一件取扱ひ候面々は別て事に臨み輕重之宜を制し心得違無之様被仰出候
に付御家中右御決定之御深意を奉體察御奉公之御覺悟可爲肝要候事

七月廿四日 (文久二年)

三 京地風聞書

一 長州侯五月二日御建白は専ら文意薩藩に相當り且於關東御周旋有之候
様 御内勅も御香取候處 勅使大原三位様并島津三郎殿江戸御着前日
道を變へ中山道より御上京に相成候儀者如何にも功を被爭候様相見申
候然處御上京之上京師之動靜御熟察に相成候處薩藩専ら透通宜有之候
趣に付少に初之御存念とは相變申候共にては無之哉尤最前長井雅樂在
府中御建白に相成候上書は御願下に相成候由世上取沙汰仕候前條之通
御内勅有之候に付ては關東の 勅書之趣一々御請も御坐候哉否御存意
被 仰上御周旋可有之筈之處此節御上京之儀些と御都合惡敷共は無之
哉之由薩藩より相唱申候
一 阪布政之助桂小五郎中村九郎兵衛之三人京師におゐて内外機密御用懸
相勤諸所周旋いたし候由之事
一 七月十六日大膳大夫様初て學習院の御參會傳奏議奏衆御出席長州侯よ
り被 仰上候件々左之通

- 一 天氣御窺
- 一 昨年以來内々存意申立 叡聞に被爲達被下候御禮
- 一 長門守の 御内命猶拜賜之御禮
- 一 御掛念御辨解奉願
- 一 御辨解被 仰聞候は、御禮
- 一 五月十三日被差下候 勅諭御請申上向後父子申談周旋可仕段之儀申上已上
- 一 中山様御書簡之事
- 一 昨日長門面會一事之無事何等之事も無人物篤直らしき人丁寧人にてろくに心底も云盡兼候程之人にて萬事無異に相濟候御安心被遊候委細は拜上萬々

十七日夕

中山公の由
忠能

姉小路様の由

公知君

- 右前顯の通にて御規式年頭御禮之様成被仰立相濟申候由
- 一 御父子様之内何れの御方關東御周旋京師御逗留有之候哉御模様未相顯不申候
- 一 薩州京師密用懸本田彌右衛門藤井良節の御兩人相勤候由之事
- 一 長州密用懸三人より本田列の參會致し吳候様頼談之由追々於所々出會いたし候處此節之儀何れも天下之爲に付無腹臆申談吳候様との事にて些少之事も其後は議合いたし候由藤井良節より直話承り申候尤長州候五月二日之御上書薩藩の相當り且 勅使の御逢無之御行違御上京に付ては兩藩行違候儀は無之哉甚懸念之段承合候處其儀は少しも懸念致し申間敷前比ケ様々々と前文之次第良節物語申候勿論薩藩へ滯話仕候内長藩より親く出入致し候儀屢見受申候事

一薩州鎮撫方島津石見病死後代り罷登候筈候得とも是まで何之様子も無之處七月二日島津右門と申大臣國許發足仕候由にて先手の面々軍役方と申役人五六十人計御國御番方御備手を云七月十七日伏着追々上京致し申候右門儀着之上京地相國寺の直に相越候由承り申候事

一薩州伏見屋敷に相滞居候岡藩小河彌右衛門列御家老連名に罷下候様申來候處未事平もいたし不申且右彌右衛門列は有馬新七列暴舉之末流にも有之准今罷下候ては三郎殿鎮撫いたし被置候に付同子之聲聞にも相係り且出府中之事に付一應は何も不仕候ては難相成旁に付暫留置度段薩藩より岡藩御留守居の熟談いたし候處至極尤之事に付國許の早々通議いたし可申段返答いたし候由にて今以相滞居近々京師薩藩買上之町家の引移候手都合いたし置候段藤井直話いたし申候是等は三郎殿鎮撫行届候名聞のため大勢引受置候儀は可笑事に御坐候

一薩藩此節の費用莫大の事に可有之兼て御國力驚入候段申候處成程疲弊

いたし候得共根元 公武之御爲薩日隅三ヶ國之士民一命を投げ三ヶ國を差出候て三郎殿被思立候事に付國用疲弊之儀は聊頓寫いたし不申候段藤井宅にて上藩舉て申候意中之儀は難計候得共其英斷果決外々之諸不藩及處有之實に此節之處置當否之境私共の弊見にては難相極御座候得共誠に天下之強國にてケ様之頸敵と境を接候儀行末無心元事共に奉存候事

一當時之勢薩長兩藩の外々藩より差て御建白も無之右は最前の勢にては日和見有之又兩藩周旋有之事に付無用に足手纏に相成候よりも不出社上策と相考或は人之跡を踏候も如何と種々之儀論も可有之候得共最早此節之儀も五步通相治候間今出張いたし候得は徳川家の怒にも觸不申事行れろに相成候間格別力を不勞して功業も相立諸侯方今ぞ至極の御出府にて御周旋時に付御國杯も急に御出府力を御添被下候様有之度杯藤井列より密話いたし候處私共も爲何識に御座候哉些汗面仕候氣味に

御座候事

一當時之勢にては急に攘夷之都も相見不申開國之儀は一切被行候氣色に相見不申候事

一勅諭の内一橋御後見越前政事惣宰職追々被仰付候よし此末は惣宰職急に御上京諸事被仰合御國是相定り兵勢御沿革等重大之事二三ヶ條相成居候處始終如何相治申候哉實に興廢存亡之大機會と相見申候右之御模様は今少程も御座候事と相考申候事

一薩州藤井良節儀は先年國難にて亡命いたし暫時御國にも相越候同藩諏訪宮之社主井上出雲事にて中程工藤左門と歎申候當時前文之通相唱候由是より十四年以前より筑前之御役害に相成居る由此節之儀に付押して登坂いたし候處三郎殿勿論其名を被知居候に付直に歸參被申付當役被命置候由にて御國元には段々知音之向有之候趣に御座候事

一土州侯御出府懸流行之癩疹にて大坂御屋敷に御滞りに相成候由然處近

來承り申候へは此節之儀御周旋有之候様 御内勅有之候處御幼年に付御斷に相成爲申と取沙汰仕申候事實何程に御座候哉同藩密用懸にも追々應接仕居候間其内實を得可申上候事

一阿州侯より御上書御座候由之處諸建白裏卦に出

御上洛等は不宜旨有之由淡州之儒者江戸居住いたし居候鈴木重種と申者當時京師相越居候者より承り申候未だ京地官家方にも御存知無之由所々手配いたし置候間手に入次第可奉備電覽候事

一御所司代松平伯耆守様御事先年櫻田異變之砌寺社御奉行御在勤にて其以前諸刑流は三奉行の事に付御吟味懸りの由にて此節御上京に相成候ては人氣に差障り候趣申立られにて御辭職に可相成と京地専ら相唱申候當時官家之權勢前々よりは爲打變世上に付前文之通相成申候哉難計候尤跡御役は本田侯被仰付候杯と唱申候間形も無之事にては有之間敷被考申候事右は今度長州勢州兩藩之御建白奉入尊覽候間席此元之様

子承り候儘相認達御聽申候勿論文意私共にも疊兼候處御座候へとも乍自由草稿之儘差上申候扱御奉行の方には私共出立先日御奉行衆井上久之允方御逢有之此節之儀御國元の屹と不申越候ては不相叶儀有之候は御目附付御横目申談申越候様格別不申越候ても相濟可申儀且出所等不正巷説は却て人々疑惑を生候間申遣間敷段御演達に相成奉得其意居申候右に付爲指儀にも無之候間此節も申越不申候間御序も御座候は、此許に御座咄にても被下候は、別て本懐之至に奉存候此段宜奉願候已上

七月廿一日

藤林健左衛門

古閑富次

甲斐武一郎

猶以申上候右は私共見込之筋も間には書加甚拙劣に御座候間必他見御用撫可被下候已上(文久二年)

四 藤堂家上書

先年より愚存之趣申上候儀に有之候處天下之形勢殆累卵之場に相成候得は是上之御處置毫髪も御謬誤被爲在候時は被對 天朝御申譯も無之且は

神祖之御鴻業も忽墜地可仕左候ては忠孝之道にも被爲背萬民塗炭に陥り候事實以不堪痛哭之至に候尤右を挽回可仕策略等無御座候得共世上之光景御心附にも相成可申哉不憚諱忌左に申上候

一 凡物事には本末と申儀有之其本末不失順序候時は雖國天下可治若顛倒仕候時は如一家一身不齊候事は古今同一に歸申候既に諸藩於橫濱港互市通商御許容に相成候根元を細澤仕候に一時之權道と申にも無之又は有無を通し四民一統融通相附候筋にも不相成其實は必竟夷狄之跳梁を

被爲厭因循苟且之御政事に歸申候儀と奉存候其大概を舉て申候得は兼て亞國條約之儀に付

禁廷に御伺に相成候處深被爲惱 叡慮に付諸大名存意書差上候様被仰付候魯亞兩國より英佛之軍艦近日渡來可仕清國全勝之勢に乘し押掛候に付應接甚御面働に候間夫迄に假條約御承知之調印相濟候は、英佛を如何様にも可申諭と亞使節申上候處右は

禁廷に御申上濟に相成不申候ては御取計も難被遊併清國之覆轍を踐候ては不容易候に付不被爲得止調印之上使節に御渡に相成候其節も同志之面々連名にて申上候通如前條危殆に相及候得は不被爲得止御處置にも可有御座候得共迅速に御使を以右之事情一應

天意御伺も可有之乍去 勅答以前に大患相生候場合に相成候ては御不本意に付臨機之御處置も無御余儀譯と奉存候へ共 天意御伺之御使不被差上調印御渡に相成候ては御違 勅にも相當り御尤にも不奉存候段

申上候事に候其後前議に付尾張中納言殿水戸前中納言殿松平越中守登城之儀等右之趣に候處過激切迫不敬之儀共に付慎被 仰付且外匹夫に至迄罪之輕重有之候得共蒙嚴咎候抔是以御余儀なき譯と奉存候得共其本は尊

天朝惡夷狄候より事起り候得は道理においては正敷事故今一段御斟酌有之可然歟と奉存候之處前顯之通忠肝義膽之士も被爲刑候に付右之黨類彌増憤り激發仕遂に彼是狼藉等有之候得共夷人交易相始候てより何一つ本邦御爲筋に相成候間閭閻の小兒に至迄異人を惡候事蛇蝎よりも甚敷上は 朝廷下至于士庶人一體同心の事にて幕府而已格別御優待被爲在候様に相見候其内爲異人本邦人を防禦いたし候様に相成右等總て本末顛倒とも可申奉存候扱英國より相願候沿海測量可致段御觸御座候處私領分伊勢之儀は神廟切迫の事に付寸土も夷狄に爲穢候ては不相成候間其段追々願立候に付先志州海岸へは碇泊も不仕通船相濟此儀は難

有奉存候事に候然る處近來御殿山を異人館に御取建に相成候杯は有志の者長大息仕候儀にて左候ては海中の御炮臺は悉皆夷狄に被下候同様の儀に御座候得は此一事は別て速に御破却に相成候様致度奉存候前條申上候通士氣踊躍仕候折柄如漢土爲異人不被致誘導候事は恐悅至極に付此上は士氣相奮候様御鼓舞有之候様奉懇願候斯相成候得は夷狄何程之難題等申出候ても應接之上御手引に相成候事も有御座間敷と奉存候何れ異人も此儘に御差置にては御國辱は申上候迄も無之事故攘夷の處に御英斷の程偏に奉希候扱此舉被爲在候に付ては如當節人心携貳各疑惑を抱候様にては事に觸れ禍起蕭牆可申候間不取敢 公武御合體海内一致に相成候様御仕向被爲在度甚差越候儀に御座候へ共其御處置と申候て外は有之間敷嚮にも粗申上候通近來被對

天朝御不實御不敬之儀も有之安政午年以後御政事何となく御苛酷之様にも奉存候得は右之件々宛然如日月蝕御改被爲在候事を天下に御示し

被遊度其内此比承知仕候に先年慎被 仰付候堂上方并尾張殿を初今般御宥免被 仰出候趣至極御尤之御儀爲天下可賀事に御座候其外匹夫逆も赤心報國の輩は御善祝被爲在候時は自然緩急之節屹と御一臂にも相成候事故吳々も如先年嚴刑酸法之御沙汰無之様奉存候乍去右は一少事とも可申上第一

禁廷に御侘不被 仰上候ては相濟申間敷細に申候得は數ヶ條可有御座候得共其綱を擧て申候得は

皇妹御降嫁杯は御模様も被爲有候哉然を曲て被爲任御願候とは返々も無勿體御事故此度御改正之期會にて 皇妹御降嫁御禮は申上候迄も無之夫よりして近來御不實御不敬の御斷等被 仰上且責て被慰 宸襟候様にと申御廉にて春秋二季には 行幸被爲在候様相成候は、稍天下之士拜伏も可仕猶又 御上洛も中古廢絶之事故俗吏共は不可然可申上も難計御座候得共近く

慎徳院様 日光御社參之儀も有之候得は右も大同小異と奉存候此儀彌
 御治定之上夫^{本ノマ}爲に海内疲弊不仕可成丈御手輕之儀被 仰出候は、一
 同感服可仕と奉存候斯相成候得は自然
 公武御合體にて海内一致に相成可申候間其機會に乘し夷狄御打拂にて
 征夷大將軍之御名相輝可申左候へは特に被爲協
 天意候而已ならず萬民安堵可仕實は
 神祖之御鴻業にも被爲劣間敷と奉存候斯く相成候も本末順序を瞭然と
 被遊被爲得機會候故之儀と奉存候對 政府右様之儀申上候者所謂遼東
 白豕に御座候得共萬一御採用被成下候得は本懐之至に奉存候已上

五月廿日 (文久二年)

藤堂和泉守

五 土州藩人大坂より同藩への文通

此度泉州侯御上洛之儀は

天朝幕府の爲薩國の力を以て屹度御周旋之思召に候處今十二三日之比

藩士堀次郎儀大原卿へ被爲召

叡慮^{通方趣カ}之達と被仰聞 叡慮之略は是迄幕府之暴政違 勅等之儀をも寛

大之御仁惠を以 御宥恕被爲遊此上には公武御合體徳川家を 御保助

被爲遊賞罰を明にし攘夷狄候様之廉々難有 叡慮之由斯之通にて御受

相調候哉否之儀をも被仰聞候由にて勿論

叡慮之處聊不奉違背奉畏候旨申上否右之通り和泉侯へも申上同十六日

朝和泉伏見御立辰之刻頃御着京一旦御邸へ被爲入候處已之刻近衛殿よ

り被爲召御參殿被爲成候處中山公正親町三條公岩倉公御參集にて

叡慮之通に^{次郎へ大原卿より}被仰聞且泉州御存慮をも御尋御座候由にて

和泉侯被 仰上候は 叡慮之處一々奉畏候乍併攘夷之儀も兎角内を整

へ不置候ては不相成儀に付先つ一橋刑部卿を以將軍家の後見とし其他尾張越前を始め賢明之諸侯へ冤罪を以禁錮或は退職被仰付候勤 王之御志有之御方を本に復し暴逆を逞し 天朝に迫りし賊を彦根侯を始間部安藤侯等を云輕重に隨ひ悉く罪に行ひ或は封を削り其地を以 天領とし畿内之地に親王方を置て 天朝の羽翼とし後に逆徒 天朝に迫て事の不相調様豫め備を立然後攘夷の策に相及可然旨申上且 叡慮をも御伺被下度旨及言上候處正親町三條公被仰候は尾越侯等を再本に復し候儀は中々難事にて可有之左様相成候ては却て内亂を醸し候様可相成旨被仰聞候由を以再泉州侯より是等の儀 叡慮の儘に御決定の上御違慮 臣へ被仰聞度 叡慮關東へ下り候上尙亦奉違 勅 叡慮候は、其節は不得止事 臣等追討可仕候 臣既に國を出し時身命を 天朝に捧げ居候上は聊願候處に非す弊藩雖微弱三ヶ國之人數を以屹度盡力可仕獨成否の處に至ては豫め難期と云共當今の人情を以て相考候處列藩の中にも勤 王之志有之諸

候數多有之候得は一度事相起候は、必ず

天關に馳集り可申依て 叡慮之處屹度御英斷を以御決定に相成候様被仰上度旨申上候由にて中山公正親町三條公早速參 内及奏聞候處 主上母敷被思召不淺 御満足之由にて其處兩公より泉州侯へ被仰聞其餘難有仰をも御蒙り候且は當時滞在の儀を被仰聞候由尤表向は諸國浪士共數多洛中へ入込居候趣に付萬一亂妨等に被及程も難計依て暫之間爲取締滯 京居候様被仰聞夜半過御退殿其儘伏見へ御歸り翌十七日伏見御引拂を以七ツ時頃御着 京に相成將又 叡慮之儀も多分泉州侯御建白之通り 御英斷に相成久世閣老 御呼立^{登カ}之上 勅書御同人に御渡に相成筈にて今十七日關東へ被 仰遣候由且幕府違 勅致候時は干戈を動す御成算故其用意は屹度相調右次第御國よりも多人數馳登御調へに相成居候由薩藩士有志之者共泉州侯御供之外夥敷伏見大坂等に相潜居候者を初其他諸藩同志之者共も萬々一和泉侯關東へ御下り之思召歟又

は聊にても手緩き思召有之候て機會を失ひ候様之儀有之時は不得止泉州侯の命を不用機に投し同志之者俱に事を可起存念に有之候由之處和泉侯前件之通之思召故孰も望に叶ひ右二藩士は素より諸藩之者迄も大に相悦ひ時を相待且薩藩役手よりも妄之儀無之様精々相制居候由

右四月十五日より同十八日迄之中承申候

長州山田又助と申者君命を受長門下關にて和泉侯へ拜謁仕候處弊藩は是迄頻に苦心致し何卒

天朝之奉休 宸襟度存念に有之候處當時寡君關東に罷在殆機に後れ候故所詮先鞭は御尊藩より被取候へ共二に至ては決して他へは不讓屹度盡力可仕旨申上候處泉州侯より決して先後杯を相争候譯には無之互に國力を盡し謀を合せ 叡慮を可奉休旨被仰聞候由

一長州侯には關東にて御周旋被遊幕府よりは是迄屢違 勅奉惱 宸襟候事は不及申失政之儀幾重にも恐入冤罪を以退職禁錮等致候賢明忠義之御

方を本に復し暴逆を逞し

天朝に迫り候逆賊を悉罰し正道に復し候上將軍自罪を謝候様被遊候思召之處有志之者は今に至り關東にて御周旋は甚手緩く何卒此機を不失朝廷より賞罰を正し候様被遊度存慮の由同藩政府は大振居候得とも君側に長井雅樂と申者有之彼之論大に害を成候由

一島津泉州侯は蒸氣船にて室津より御上陸之由鹿兒島より大坂まで二晝夜にて往來候由也

一福岡侯は御參府之筈にて大倉谷迄御出被遊候處同所にて御病發姫路迄御引退御歸國共又は同所にて御決心御上 京とも云伏見にて人足御履調等有之由なれ共御上京不詳右四月廿二日迄承申候 (文久二年)

六 井口來狀

一大坂會集浪人名前

中山公諸大夫

河内介嫡子

清川八郎事

田中河内介

同 左馬助

出羽大谷雄藏

安積五郎事

武藏木村惣之助 筑前平野次郎 備中飯居曾太郎

肥前中村主計 京青木頼母 久留米原常吉

同 荒木半三郎 同 酒井傳四郎 同 古賀曾一

鶴田陶司 同 中増俊太郎 以下岡と見ゆる 小河彌右衛門

田邊歸一郎 赤座源太郎 堀鎌之助

夏日淳平 樋口勝之助 安野藤次郎

井上重五郎 高野左一左衛門 森玉藏

福原武一郎 田部龍作 宇野兼藏

高島善左衛門 廣瀬友之助 矢野勘太郎

彌左衛門代

同人

左一左衛門召連候者

竹五郎

末

吉

庫兵衛

歸一郎代

友之助代

勘太郎召連候者

甚三郎

義三郎

喜助

右二十六人豊後岡人數也

筑前秋月

豊後岡

野溝僕

海賀宮門

野溝甚四郎

長之助

同

光五郎

此名前比日安井より承り候人數とは相違いたし是は聖堂當りにて取は
やし候名前にて委敷定て出所可有之候へ共承り届は致不申候已上
大概當時之形勢右之趣に候處爰に一り氣毒なる事は永井雅樂頃日來引
入之末甚不首尾と申事にて世上には切服致し候と評判も有之候子細は

未篤と不相分候得共京都江戸主人へ申出候御振り齟齬致し候事有之何共申譯無き事出來致候と申事に候右は初發森井聖堂邊にて聞出し咄候得共左様之麤忽容易に可有之人柄にも相見不申如何哉と存候へとも初發此方様へ御相談口は將軍様御上洛願曰有之度候へとも當時柄萬民難儀にも可有之田安様にても御名代にて可然と申事に候處此度京都より下候ては是非御上洛に無_レは難相濟様立きり被申立久世様もとふか夫れに困り引入に相成候様之説も有之此處前後之通歴々不審有之居小子不叶□に説之替る處之子細を最早探索_正致居候處に_レ大方夫等之處歟と推察致候昨日參候へとも鹽屋參り居是非只今老中役人に_レめつたやたらに話出も遠慮いたし一應之處承り矢張森井話と大同小異に_レ説話之鼻計りに齟齬有之と申事に候何様返_覆表裏を申様なる人柄に_レは有之候へとも才力家にて少權變に達候様自負之氣味も相見京都には京都に説之入候様老中には老中に説之入候様聊口のすへり様よ

り左様之儀にも至候歟又は家軸にも兩説有之周布正之助と申御中老此方實は正當之人物にて人望も有之候へとも行不申永井説に相成候由にて内輪之議論六ヶ敷共に_レは無之や右先推量之處に_レ實正之處は追_探相届次第可申入此段熊谷は勿論學校へは辛島へ通路可有之候先は右差置申候已上

六月朔日當賀

呈 助

忠 三 郎 殿

於江戸亘殿へ啓太より差出申候書付之寫二通左之通

言上

伴野七之助

岡田斧五郎

杉浦龍次郎

四郎太夫と改名被仰付候